

聖徒の道

2
1997

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1997年2月号



表紙——モルモン大隊の隊員たちは、聖徒たちがアイオワからロッキー山脈までの2,000キロに及ぶ旅を始めたばかりのとき、愛する人々を後に残して行かなければならなかった。隊員の一人、ヘンリー・スタンデーはこう記している。「そのとき、妻には家もテントもなく、持っているものと言えばわずかな食料と3ドルのお金、そして牛1頭だけだった。しかし、わたしは喜んで友を後に残し、評議会の言うとおりの徴兵に応じようと思った。」(フランクリン・アルフレッド・ゴールダー、トーマス・A・ベリー、J・ライマン・スミス共著、*The March of the Mormon Battalion from Council Bluffs to California* 『カウンシルブラフスからカリフォルニアへのモルモン大隊の行軍』、ヘンリー・スタンデーの日記から引用、pp.138-139。裏表紙の言葉は、“Autobiography of Louisa Barnes Pratt” *Heart Throbs of the West* 「ルイーザ・バーンズ・プラット自叙伝」『西部の鼓動』ケート・B・カーター編、pp.235-236より引用) (表紙の写真/ウェルデン・アンダーセン。本誌「信仰の遺産」p.32参照)

こどものページ——『英雄——ジョセフにならって』 リズ・レモン画
作者がジョセフ・スミスのモデルを務める男性の写真をとっていると、小さな男の子がモデルにつきまとい、その人することをまねし続けました。ジョセフ・スミスは、わたしたちみんながならうことのできる勇気と信仰の模範を示してくれました。

一般

大管長会メッセージ——「僕ジョセフを器として、神は何とすばらしいものを造り出されたことか！」

大管長ゴードン・B・ヒンクレー	2
モンゴルの大きな変化 メアリー・ニールセン・クック	10
信仰こめて、一歩ずつ ロバート・L・バックマン	14
歌——信じ、進まん K・ニューエル・デイリー	22
新任教師のための助け パトリシア・P・ピネガー	28
試練には必ず目的があります エディマール・ボテロ・スペルティ	30
信仰の遺産 R・バル・ジョンソン	32
福音は秘密にしておくものではありません ——良きおとずれを分かち合しましょう	
マリサ・ホイタカー・ハンフリー	44
「喜ばしい出会い」 フアン・アルド・レオーネ	48

青少年

神殿への旅 ジュリア・ハーデル	8
質疑応答 どうしたら、心の中から悪い言葉を一扫できるでしょうか	25
アイトウタキの10代の少年少女 マージョリー・ハンフリーズ、ジーネット・ウエイト・ベネット	46

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——最善の賜物を求める	24

こども

モルモン書物語 イエス、子どもたちをしゆくふくされる	2
小さなお友だちへ——アウグスト・A・リム長老	4
ナタリーの約束 ジェイミー・マッコーマー作	6
おもちゃばこ	9
たんけん——クモラの宝を探し求めて シェリー・ジョンソン	10
安息日のためのメモリーボックス ポーラ・J・ルイス	13
分かち合いの時間——わたしの福音の標準 カレン・アシュトン	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

編集長：ジャック・H・ゴースリンド
顧問：L・ライオネル・ケンドリック、ウィリアム・ロルフ・カー
教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル、ディエーン・ウォーカー
編集補佐：ジェニファー・グリーン・ウッド
工程管理：メアリーアン・マーティンデル
出版補佐：ベス・デーリー

デザインスタッフ
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル

予約購読スタッフ
ディレクター：ケイ・W・ブリックス
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道1997年2月号第41巻第2号
発行所：末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所：株式会社 リック
定価：年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright©1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1995年9月 翻訳承認—1995年9月 原題—International Magazines February, 1997. Japanese, 97982 300

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎03-5668-3391

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. U.S.A. and Canadian subscription price is \$9.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE. CHANGES CANNOT BE MAID UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P. O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, U.S.A. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

『リアホナ』をすべての家庭に

わたしが再び教会の集会に出席するようになったことや、支部の集会を我が家の倉庫を活用して開いていることをつづった手紙が、数年前の『リアホナ』(スペイン語版)に掲載されました。やがて支部では、集会用の建物を借りるようになり、今年はさらに大きな建物に移りました。そして先日、集会所を建てるための土地を購入しました。

現在、支部で『リアホナ』の予約購読を担当していますが、わたしの目標はすべての家庭に『リアホナ』を行き渡らせることです。『リアホナ』を読むことによってわたしたちは霊的に強められ、たくさんの困難な問題への答えを見いだすことができます。とりわけ大管長会からのメッセージは、苦難の多い今の時代に生きるわたしたちに大きな励ましを与えてくれます。

アルゼンチン、ロサリオステーク、ゴベルナドール・ガルベツ支部
ビルヒニア・デ・ラウリノ

60年間の光

ノルウェーで発行されている『リェース・オーベル・ノルゲ』(ノルウェー語版。「ノルウェーの光」の意)は今年で創刊60周年を迎えました。1937年に創刊号が出版されたときには、わたしたちノルウェーの聖徒は皆、教会の機関誌が自国語で出版されることをとても誇らしく思いました。創刊当初は、伝道部が隔月に発行する、12ページつづりの小さな会報のようなものでした。一度読み終わっても、捨てずに大切に取っておいて、繰り返し読んだものです。

第二次世界大戦中に毎月発行されるようになり、わたしたち北方の地に住む者にとってこの機関誌が教会本部とわたしたちを結ぶ唯一のきずなとなりました。

やがて、この機関誌も国際版と同じ内容の興味深い記事を掲載するようになりました。この10年間、わたしはローカルページ「キルケヌート」の編集に携わっています。

わたしは過去60年間にわたって同機関

誌をすべて保存しているので、今までにノルウェーで伝道した宣教師やここに住んでいた教会員に関する記事をいつでも取り出して読むことができます。これらの友人の多くが夫婦宣教師、伝道部長、地区代表、神殿長として、あるいは大使や旅行者として再びノルウェーの地を訪れています。

わたしたちは、自国語でこの機関誌を読むことをほんとうに感謝しています。この機関誌はまさに、わたしたちが天父と交わした聖約に忠実でいられるように導いてくれる光のようです。ノルウェー、オスロステーク、オスロ第2ワード
オズムンド・H・ヘルネス

奉仕による成長

1994年にバプテスマを受けて以来、所属する支部で全力を尽くして奉仕し、天父のために働きたいと、祈りを通して天父に願い続けてきました。そして1995年、わたしは支部長に召されました。

支部長として働いていると、時に困難にぶつかります。これまで、多くのチャレンジに直面してきました。特にこの責任を受けて最初の数か月間はそうでした。しかし、ひざまずいて祈り、助けを求めるとき、天父は必ず祈りにこたえて、救いの手を差し伸べてくださいました。

イタリア・カタニア伝道部レチエ支部
ミケーレ・バルトリ

大きな助け

わたしは「汚れたものを遠ざける」(『聖徒の道』1995年9月号)という記事にとっても感謝しています。転校して現在通っている新しい学校には、末日聖徒がごくわずかしかなかったのですが、この記事のおかげで、そのような環境の中でも良い模範を示せるようになりました。最近、今までよりも頻りに聖文を読み、祈るよう努めています。そして、祈りと聖文学習がわたしの生活において非常に大きな助けとなることを知りました。

匿名



「僕^{しもべ}ジョセフを器として、 神は何とすばらしいものを 造り出されたことか！」

大管長
ゴードン・B・ヒンクレー

ウ イリアム・W・フェルプスのすばらしい賛美歌の歌詞は、いつもわたしを感動させてくれます。「たたえよ、主の召したまいし 主と語りし 預言者を 末の時を始めたる 業を世、^{あが}皆崇めよ」(「たたえよ、主の召したまいし」『賛美歌』16番)

預言者ジョセフ・スミスの生涯とその奉仕の業は、まさに偉大な事柄、驚くべき出来事に満ちあふれています。それらはわたしたちの遺産となっています。そして、これからも人類にとってますますその意義を深めていくことでしょう。ジョセフ・スミスは、復活されたキリストについて改めて証^{あかし}するために選ばれた、末日の主の僕^{しもべ}でした。

復活の事実を疑う声^{おういづ}が横溢する世に対して、ジョセフ・スミスはキリストが復活して現在も生きていらっしゃることをはっきり証しました。その証はいろいろな場で、様々な方法で語られました。

第1に、ジョセフ・スミスは御父と御子にまみえ、御声^{みこえ}を聞いたその比類ない示現について、自己の体験を語りました。御父と御子は姿形、体と声を持つ別々の御方でした。御二方は人が友と語るように(出エジプト33:11参照)ジョセフ・スミスとお話しになりました。



ジョセフ・スミスは御父と御子にまみえ、御声^{みこえ}を聞いたその比類ない示現について、自己の体験を語りました。

わたしは、教会が設立された1830年4月6日の情景を想像してみたことがあります。教会は、ホイットマ一家の簡素な丸木作りの農家から発展を遂げ、規模においては全世界に広がる組織となり、その教会員は数百万を数えるに至るのです。

第2に、彼は主の器となって『モルモン書』を世に出した者として、この本を読んだ人、将来読む人すべてに救い主について証^{あかし}しています。絶えず語られたその言葉は、地上に来て全人類の罪のために命をささげ、「眠っている者の初穂として」(1コリント15:20)復活された約束のメシヤを証するものです。

第3に、ジョセフ・スミスはこの地上に教会を組織したことによって、生ける主を証しました。この教会はイエス・キリストの御名を冠^{かむ}しており、教会員は言葉と模範によって、自分たちがその御名により集い、仕える主を証しているのです。

第4に、ジョセフ・スミスは預言者としての力により、次のすばらしい言葉をもって復活された主を証しました。

「そして今、小羊についてなされてきた多くの証の後、わたしたちが最後に小羊についてなす証はこれである。すなわち、『小羊は生きておられる。』

わたしたちはまことに神の右に小羊を見たからである。また、わたしたちは証する声を聞いた。すなわち、『彼は御父の独り子であり、

彼によって、彼を通じて、彼から、もろもろの世界が現在創造され、また過去に創造された。そして、それらに住む者は神のもとに生まれた息子や娘となる。』(教義と聖約76:22-24)

最後に、彼は命の血をもって自分の証を結び固めました。贖^{あがな}い主の御名によって業を遂行し、贖い主について真理を語り、その真理のために殉教したのです。

まさに、預言者ジョセフ・スミスは、生けるキリストの傑出した証人です。

教会の設立

わたしは、教会が設立された1830年4月6日の情景を想像してみたことがあります。ジョセフ・スミスの使命を信じた数人が、その日、ともに集まりました。神の啓示は、その日が「わたしたちの主であり救い主であるイエス・キリストが肉体を取って来られてから、1830年」

(教義と聖約20:1)であると告げています。

預言に満ちた示現を目の当たりにしたジョセフ・スミス以外に、自分たちが始めようとしている業がどれほど重大かを実感していた人がその日集まった人の中にいたのでしょうか。教会は、ニューヨーク州フェイエットの片田舎にあったホイットマ一家の簡素な丸木作りの農家から常に発展を遂げ、規模においては全世界に広がる組織となり、その教会員は数百万を数えるに至るのです。

設立以来の教会の成長を思うにつけ、ニューヨークの田舎の農場からグレート・ソルトレーク盆地まで、そしてそこから地上の国々へと苦難の中を歩んできた教会の姿が、わたしたちの心の中に一大叙事詩となって描き出されてきます。

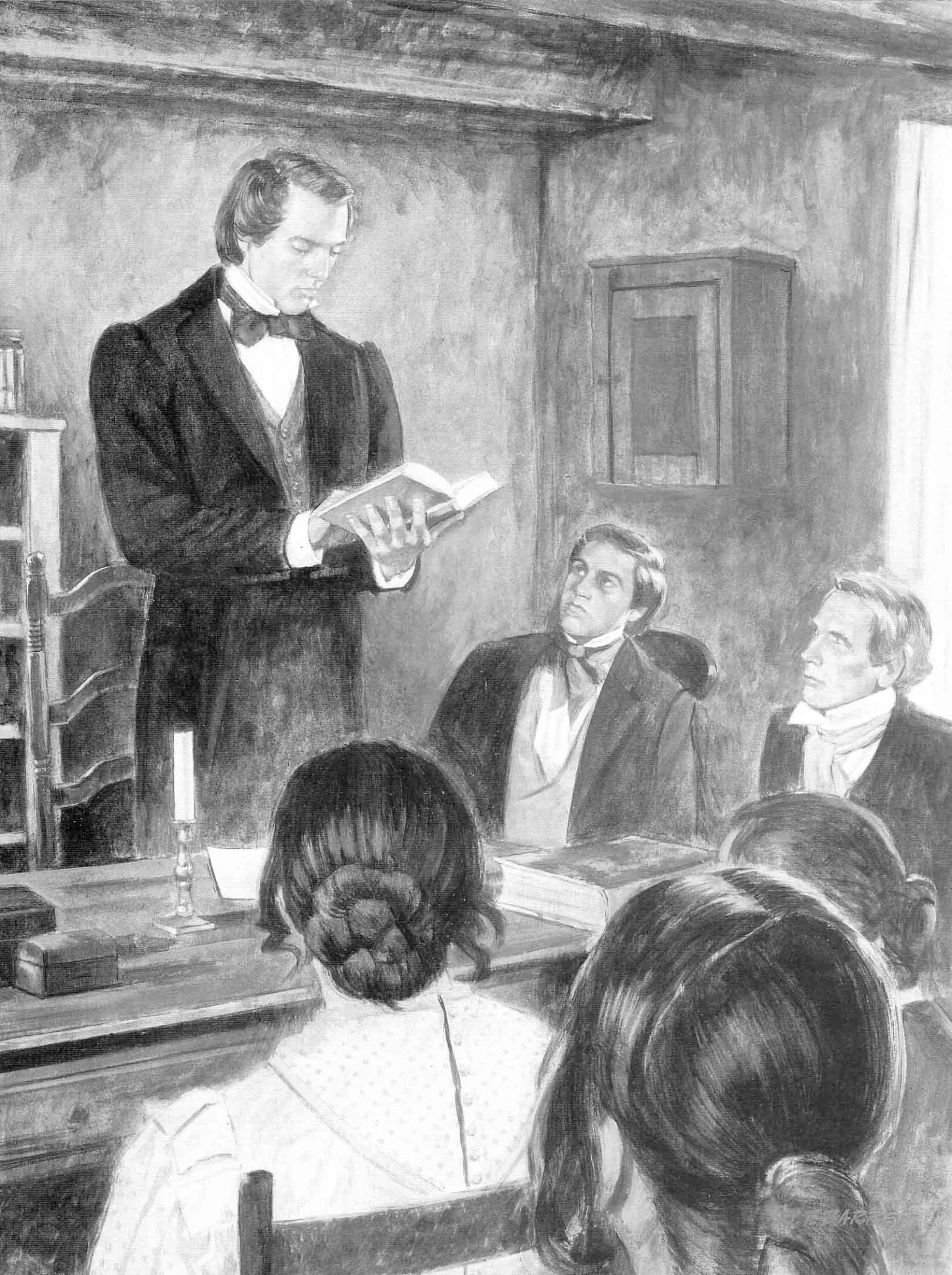
教会が設立されて間もなく、迫害の魔手が忍び寄ってきました。そのため、オハイオ州カートランドへの移住が決定されました。

その地で初期の会員たちは美しい神殿を建てました。その奉獻の祈りの中で、青年預言者は天の力を求めています。「教会が暗黒の荒れ野から出て来て、月のように美しく、太陽のように輝き、旗を立てた軍勢のように恐ろしいものとなり[ますように。]」(教義と聖約109:73)しかし、この祈りはすぐにはこたえられませんでした。聖徒たちが侮蔑を受け、経済は疲弊し、指導者はタールを塗られたり羽毛を付けられたりしました。こうして、カートランドの平和は覆されたのです。

教会はミズーリに別の中心地を築きました。そこはシオンとなるべき土地でした。しかしその夢も、火を吹くライフル、放火、夜を徹して襲い来る暴徒の叫び声や不法な追放令によって破れました。こうして聖徒たちは、ミシシッピ低地に難渋し、河を渡ってイリノイ州につかの間の避け所を求めることとなったのです。

逃れ行くその民に、預言者は同道しませんでした。1838年から39年の厳冬期、彼はミズーリの監獄の冷たい地下牢に不当に拘禁されていました。

そのような状況にあって、希望を失い、衣食にも事欠き、孤独にさいまなれた預言者は、「おお神よ、あなたはどこにおられるのですか」(教義と聖約121:1)と叫



彼は聖任された神の僕しもべでした。このジョセフは今の神権時代の大きいなる預言者、つまり「聖見者、翻訳者、預言者、イエス・キリストの使徒」(教義と聖約21:1)として立てられたのです。

びました。

預言の成就

その祈りに対して、次のような驚くべき預言の言葉が啓示されました。

「地の果ての人々があなたの名を尋ね、愚かな者はあなたをあざ笑い、地獄はあなたに激怒するであろう。

一方、心の清い者と、知恵のある者と、高潔な者と、徳高い者は、絶えずあなたの手から助言と権能と祝福を求めらるであろう。」(教義と聖約122:1-2)

兄弟姉妹、地上各国に築かれた大きいなる神の王国に属するわたしたちすべてが、当教会の設立と同様、この預言の成就そのものなのです。

ジョセフ・スミスは、聖見者として示現を見た以外、わたしたちのいるこの現代を見ることはありませんでした。彼は1844年6月27日、うだるような暑さの中、イリノイ州カーセージで死亡しました。

そのときその場にいたジョン・テラー長老は、ジョセフ・スミスの働きを次のように約言しています。「主の預言者であり聖見者であるジョセフ・スミスは、ただイエスは別として、この世に生を受けた他のいかなる人よりも、この世の人々の救いのために多くのことを成し遂げた。……彼は神とその民の目に偉大な者として生き、偉大な者として死んだ。」(教義と聖約135:3)

教会が設立されてから167年がたとうとしています。わたしたちはこう叫びたい気持ちです。「僕ジョセフを器として、神は何とすばらしいものを造り出されたことか！」

わたしはジョセフ・スミスについて証あかしします。彼は聖任された神の僕しもべでした。このジョセフは今の神権時代の大きいなる預言者、つまり「聖見者、翻訳者、預言者、イエス・キリストの使徒」(教義と聖約21:1)として立てられたのです。この証に加えて申し上げたいもう一つの証は、大管長会の構成員と十二使徒定員会の会員は今日、ジョセフ・スミスに授けられた神権の鍵かぎをすべて有しており、ジョセフ・スミスの正当な後継者、すなわ

ちこの教会の大管長の指示の下にそれらの鍵を行使しているということです。

教会は、167年前に組織され、主によって次のように表現されました。「全地の面に唯一まことの生ける教会……。教会について言えば、主なるわたしはこれを心から喜んでいる。しかし、それは全体について言うのであって、一人一人を指すのではない。」(教義と聖約1:30)教会は雄々しく歩んできました。そして今、力のとりで、揺れ動く世界の確かな錨いかりとなっています。その将来は神の教会、神の王国として堅固、不倒です。

わたしたちが主の教えに従い、働くことにより、主の目的を成就していけますように。また、生けるまことの御方であり、わたしたちの頭かしらである主イエス・キリストに倣った生活を送ろうと一人一人が努めていけますように願っています。□

ホームティーチャーへの提案

1. ジョセフ・スミスは、復活されたキリストについて改めて証するために選ばれた、末日の主の僕であった。

2. この傑出した証人は、以下のように様々な方法で証を伝えてきた。

—御父と御子についてのその比類ない示現を語った。

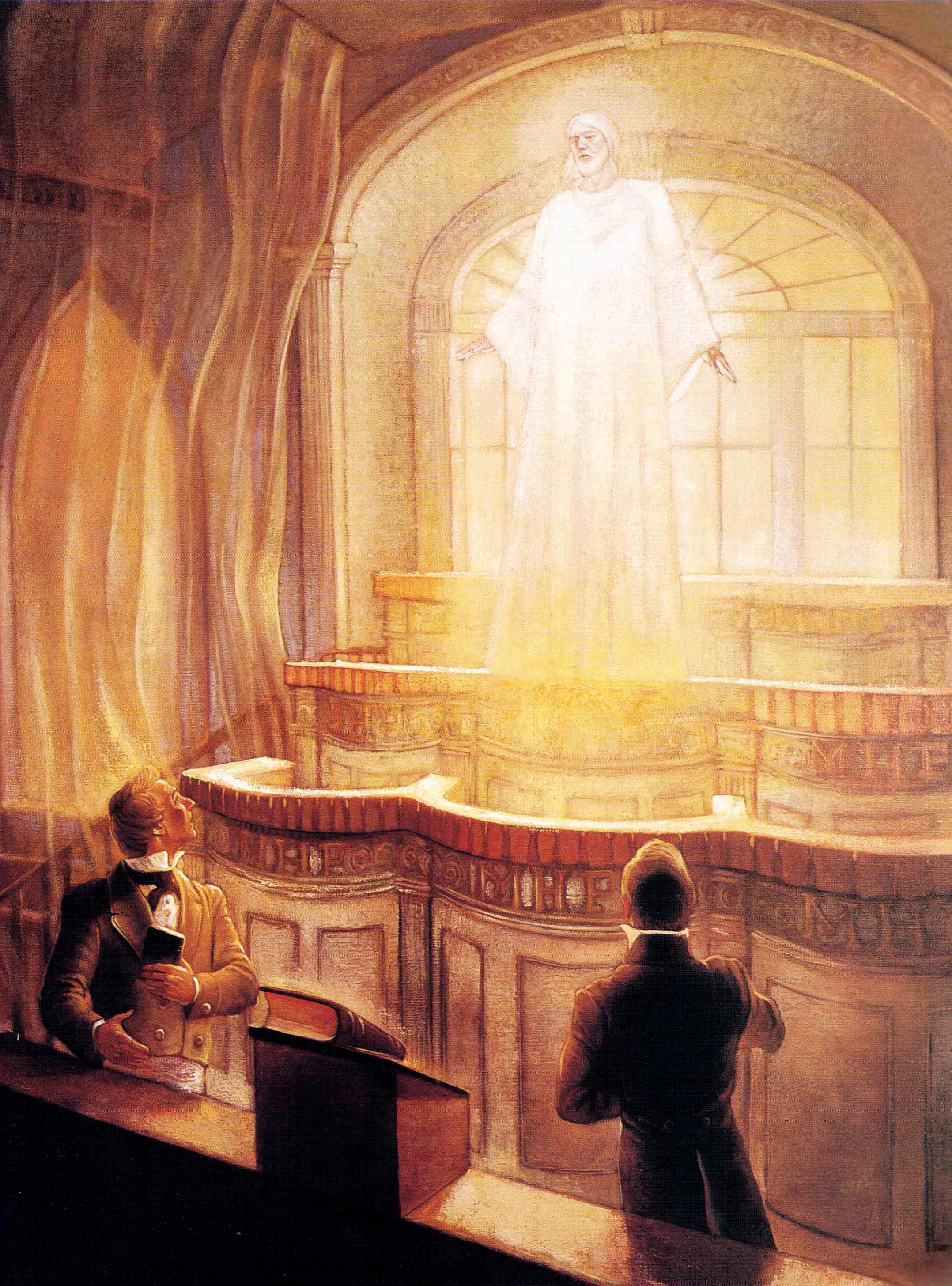
—主の器となって『モルモン書』、すなわちキリストの新しい証を世に出した。

—イエス・キリストの御名みなを冠する教会を組織したことによって、生ける主を証した。

—主からの多くの啓示を記録し、現在に伝えることによって、主を証した。

—自らの命をもって自分の使命を結び固めた。自分の証した真理のために殉教したのである。

3. 大きいなる末日の教会に属するわたしたちすべては、「地の果ての人々があなたの名を尋ね……るであろう」(教義と聖約122:1)というジョセフ・スミスに与えられた預言の成就である。簡素な丸木作りの農家から発展を遂げ、規模においては全世界に広がる組織となり、その教会員は数百万を数えるに至るのです。



神殿への旅

ジュリア・ハーデル

PHOTOGRAPHS OF MEMBERS COURTESY OF JULIA HARDEL

最近、わたしはドイツ・ハンブルグステーキからドイツ・フランクフルト神殿へ、死者のためのバプテスマを行い、ユースカンファレンスに出席するために、100人を超える若い男性・若い女性と一緒に旅をしました。わたしは13歳で、現実離れた期待を持っていたため、初めはその旅が、思っていたほど楽しくありませんでした。

わたしたちはバド・ハンブルグのユースホテルに泊まりました。そのホテルはかなり古い建物で、部屋は薄暗く、家具は古びていました。昔の騎士がそのベッドで寝たのではないかと思ったほどです。わたしたちのグループの中には、自分の家と同じように快適な所を期待し、第一印象で失望し、家へ帰りたくなった者もいました。

指導者はわたしたちを励まし、わたしたちより前にこの地上に住み、神殿で身代わりのバプテスマをしてくれるのを待っている人々のために奉仕する目的でここへ来たことを思い起こさせてくれました。

ユースカンファレンスの活動や講習会に参加するにつれて、わたしたちの気持ちはだんだんと明るくなってきました。毎朝、礼拝集会が開かれました。その集会を通じて、わたしたちは個人的な多くの疑問に答えを見いだしました。そして、ある晩、地域会長会の一員であり、七十人のディーター・F・ワークトドルフ長老を迎えてファイヤサイドが開かれました。長老は、来年達成したいと思っている目標を書き出すように勧めました。わたしたちは目標を紙に書いて、封筒に入れ、自分自身のあて名を書きました。1年後にこの手紙を受け取ることであります。わたしは今、自分の目標達成に向けて努めています。

旅行の後半になると、家に帰りたいたいという声はもう聞かれなくなりました。わたしたちが共通の目的を目指し

て一致を深めるにつれ、遊びやゲームなどの楽しむための活動はもとより、物質的な環境などそれほど重要ではなくなったのです。例えば、ある晩にパーティーを開く計画がありましたが、そのことに対するうきうきした気持ちはいつの間にか薄れていました。

参加者の多くは実際に霊的な経験を求めて神殿にやってきましたのだということを、わたしは度々感じました。そして、そのような義にかなった願いは神殿参入によって満たされました。感謝の涙が流れ、友情が強められました。バプテスマフォントほど天父を近く感じられる場所は、この地上にどこにもありません。自分自身のエンダウメントを受け、日の栄えの部屋へ入るために神殿へ行く日が来たら、どんなにすばらしいでしょう。その日がいつ来るか分かりませんが、今から待ちどおしく思います。わたしは主の宮へしばしば戻って行きたいと考えています。

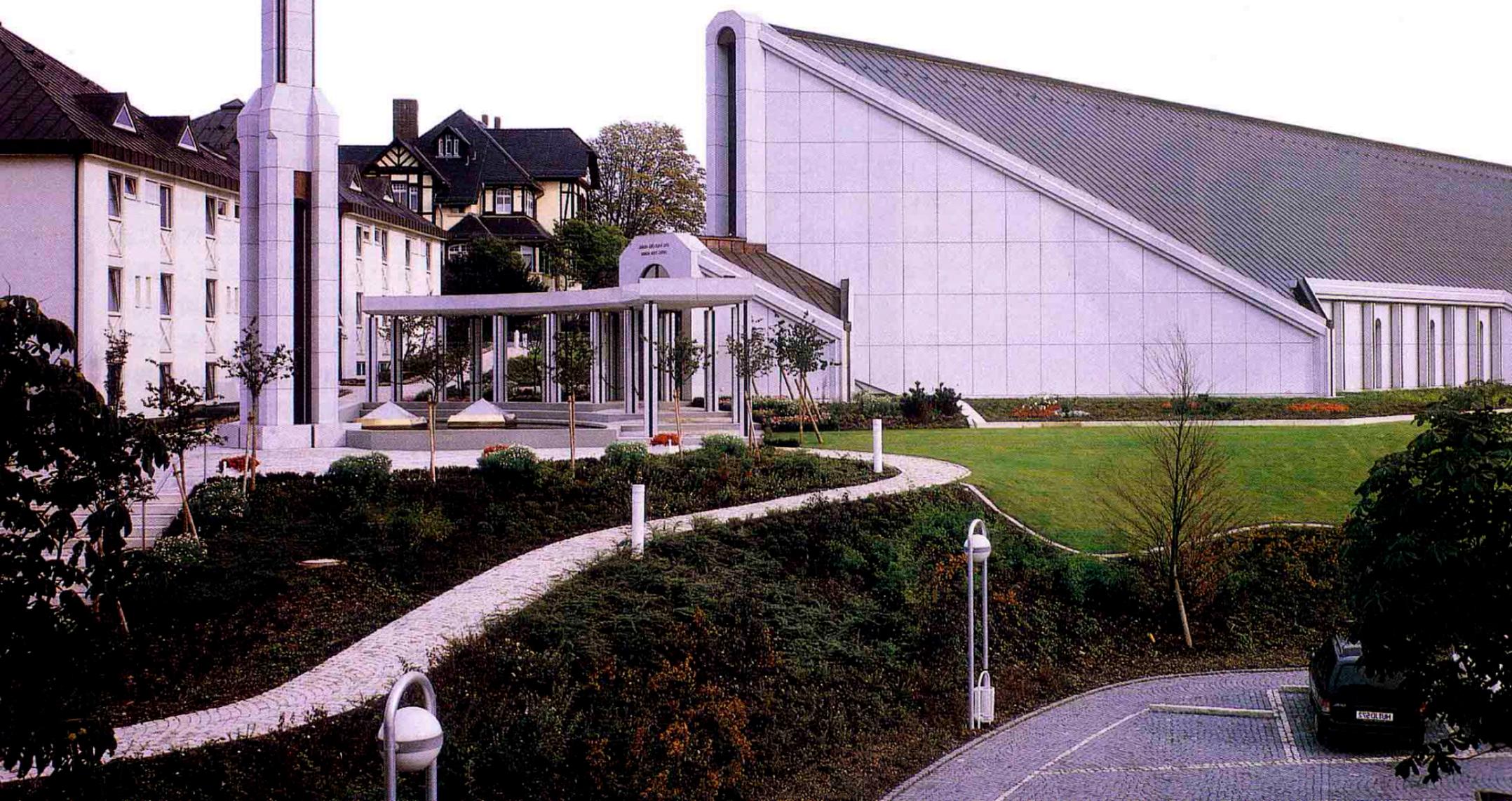
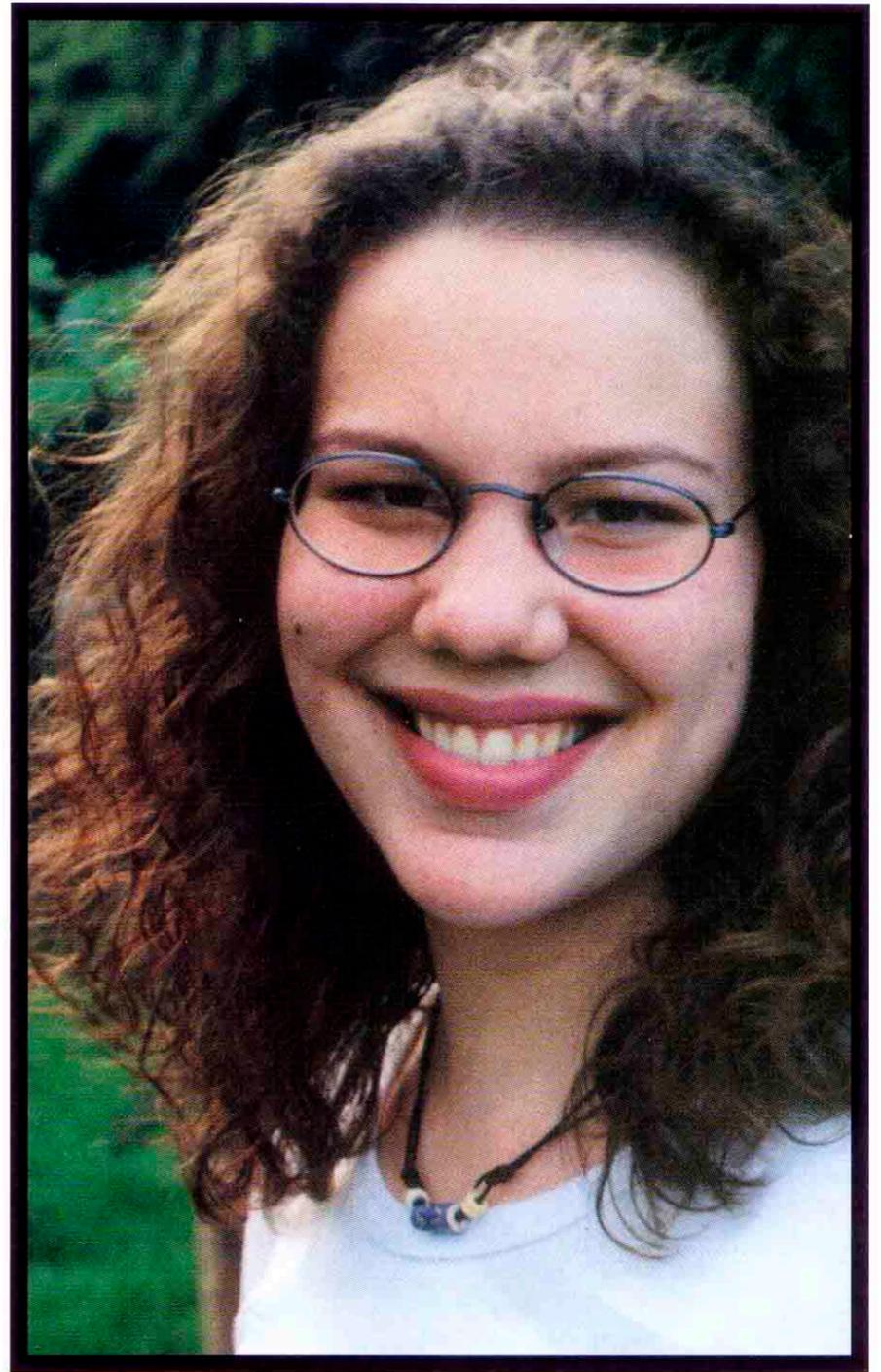
ユースカンファレンスに参加したわたしの友達の中には、神殿参入する準備をしていなかった人もいました。でも、次回には活動に参加するためだけではなく、神殿参入できるようになりたい、という考えに変わったようです。

最後の証会では、皆が一致の精神を感じました。青少年の集まる証会はどれもすばらしいものですが、この証会は特別でした。神殿で経験した特別な気持ちについて話してくれた人もいました。教会へ戻りたいという人もいました。また、家族との関係を改善したいという人や、天父に近づきたいという人もいました。

ユースカンファレンスに参加し、神殿に参入して、わたしたちは聖霊を感じました。そして、たくさんの思い出を胸に家へ帰りました。それは居心地のよくない宿泊施設^{みたま}についてではなく、心の中に感じた御霊についての思い出なのです。□



ジュリア・ハーデル (右) は、
100人の若い男性・女性と
ともに、ドイツ・フランクフルト
神殿に旅行した。死者の
ためのバプテスマを行い、ユ
ースカンファレンスに出席す
るためである。





モンゴル

モンゴルの大きな変化

メアリー・ニールセン・クック

「**モ**ルモンの開拓者」という言葉を考えてみてください。どのようなことが思い浮かびますか。恐らく、手押し車を引き、ほこりまみれの平原や雪に覆われた山々を越えてユタの新天地にたどり着こうと懸命に努力する19世紀の末日聖徒のイメージではないでしょうか。

しかし開拓は、何も19世紀のアメリカに限ったことではありません。今日、世界中の末日聖徒が母国に教会が根付くよう開拓に励んでいます。そんな新しい国々の中には思いがけない国もあるかもしれません——例えばモンゴルのように。

「モンゴル」と聞くと、大草原を疾走するジンギスカンとその精かな勇士たちを思い浮かべる人が多いはずです。北はシベリア、南は中国に挟まれたモンゴルは、歴史的に隣国との紛争の絶えない国でした。しかし、現在のモンゴルは、社会的・経済的・政治的

な変化を遂げる中、平和と繁栄を求めています。この様々な変化で見逃すことのできないのが、イエス・キリストの福音を学ぶにつれ「心の中に……大きな変化」(アルマ5:14)を経験している謙遜で真理を求めるモンゴルの人たちです。

モンゴルは、社会主義から自由市場経済に移行する過渡期にあります。かつて史上最大の領地を誇る帝国の中心だったモンゴルは、後に約3世紀に渡って中国からの支配を受け、その後1922年にはソ連で最初の衛星国となりました。ソ連の崩壊に伴い、モンゴルは1990年に複数政党制と民主的体制を確立しました。この国の変化は、国の230万人の人口の大多数が住んでいる都市部で最も顕著に見られます。そのほかのモンゴル人は、おもに政府が運営する牧場に住んだり、羊ややぎ、やく、らくだ、馬、牛を飼う遊牧民として草原で生活したりしています。公用





上—ウランバートル・ツール支部のセンドクー・バツルセ支部長とモンクザヤ夫人，娘のミューレン。



語はモンゴル語で，主要な宗教はラマ仏教とシャーマン教です。

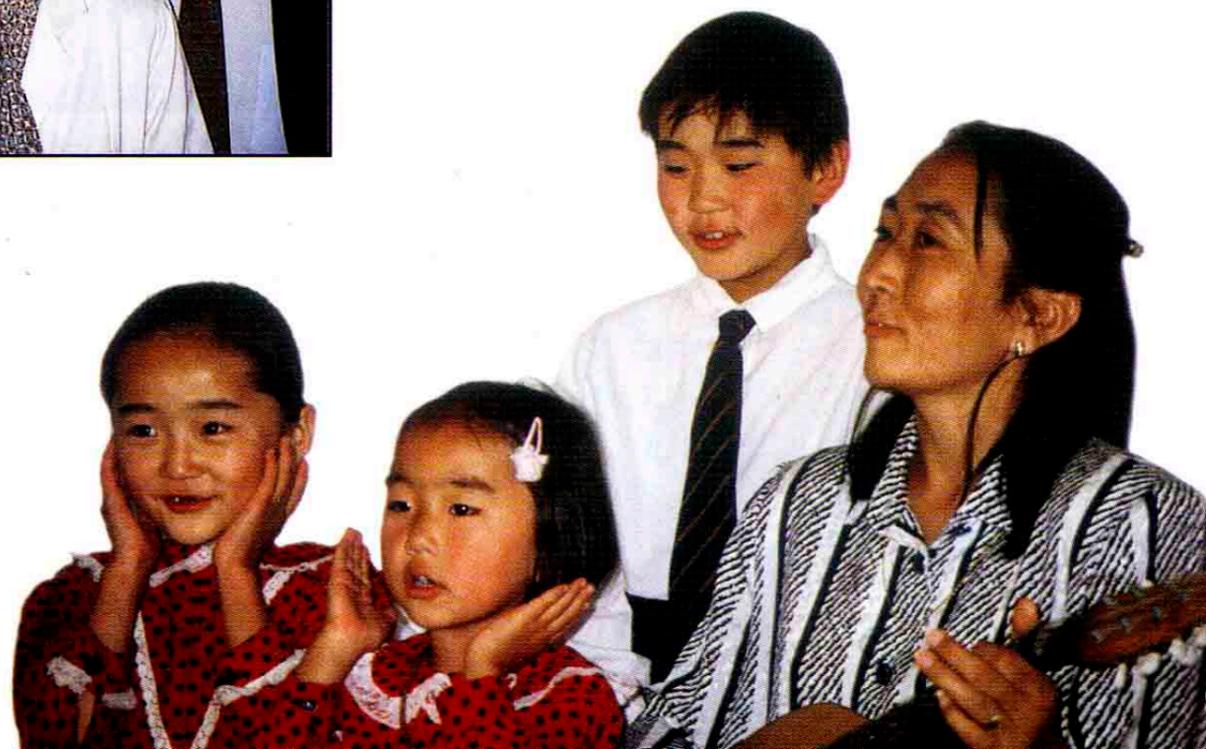
七十人のモンティ・J・ブラフ長老が政府の役人や大学の学長たちと会見して間もなく，1992年と1993年に，5組の夫婦宣教師がモンゴルの高等教育制度を援助し教会を紹介するために入国しました。1993年，十二使徒のニール・A・マックスウェル長老が，福音を宣べ伝えるためにモンゴルを奉献し，その同じ年にウランバートル支部が組織されました。

首都であり，この国最大の都市であるウランバートルには対照的なものが数多く見受けられます。住民の多くが「デル」と呼ばれる民族衣装と，色鮮やかな帽子，そしてつま先が上を向いた装飾的な革の長靴を身に着けているものの，典型的な洋装の人たちも大勢います。古ぼけたロシア製の改造乗用車，四輪駆動車やトラックの横を新型のドイツ車が走り抜けて行きます。そ



左—救い主の絵が飾られた小さな店。この店はドヨディン・ダスケレルと夫のトグトキン・エンクツシンが経営している。

下—ドヨディンと3人の子供。(ダスケレル家には5人の子供がいる。)





して、自動車は時には町中で草をはむ家畜をよけて走らなければなりません。

1993年の2月、ラムシャブ・プレブスレンがモンゴル生まれのモンゴル人として初めてこの国でバプテスマを受けました。プレブスレンは、モンゴル西部で育ち、フェルトで円形に内装された「ゲル」というテントに住んでいました。家族のおもな問題は、摂氏零下40度まで冷え込む厳しい冬に家畜を養うことでした。年に数回、家族はゲルを畳み、新しいえさ場になる草原を求めて移動したものでした。

プレブスレンが初めてスタンレー・スミス長老に会ったのは、モンゴル国立大学でスミス長老のマーケティングのクラスを受講したときでした。「クラスメートとわたしは、このようなアメリカ人の専門家がなぜモンゴルに来ようと思ったのか興味をそそられました」とプレブスレンは当時を振り返ります。

「スミス長老は教会の話をして集会に誘ってくれましたが、頂いた住所が彼のアパートのものだったので、わたしたちは大変驚きました。」

プレブスレンとバツルセは夫婦宣教師たちの小さな集会に出席し、レッスンを受けることにしました。二人は教会に入り、バツルセは後にウランバートル・ツール支部の支部長に召されました。今では教会員数は全国で550人を超え、ウランバートルに3つの支部、首都の北西に位置する人口4万4,000人の町エルデネットに一つ、そしてウランバートルの北にある人口6万5,000人の

町ダルハンに一つ、支部があります。

現在ウランバートル・セベ支部の支部長を務めるトグトキン・エンクツシンは次のように回想します。モンゴルの社会主義時代には、国民は「宗教について教わることがありませんでした。道徳的価値観が低下し、飲酒、喫煙、そして不道德な行為が容認されるようになりました。でも、子供のころ、祖母はわたしに神様のことを教えてくれました。仏教徒にもかかわらずイエス・キリストについて話してくれたのです。わたしは宗教こそ国民を一致させ、向上させてくれるだろうと感じました。」

エンクツシンは自分の人生を変え、母国の助けとなるものを見つけたいと祈りました。彼は次のように言います。「自分がどんな神に祈っているのかも知りませんでした。でも両親は、神が存在するなら必ず助けてくださると言ってくれました。」イエス・キリストについてもっと知りたいという熱意^{しょうへい}で、エンクツシンはドイツ留学の招聘を受けることにしました。ドイツには様々なキリスト教の教えがあるのを知っていたからです。

ドイツ滞在中のある日、エンクツシンは町で末日聖徒の宣教師に出会いました。「ロシア語とドイツ語の『モルモン書』を頂きました」と彼は思い出します。「わたしは一昼夜で読み終えました。『モルモン書』が大好きです。」その2日後に彼は教会に出席し、1993年の夏にバプテスマを受けました。「バプテスマを受けることを心からうれしく思いましたし、もしかしたらモンゴル人最初の教会員かもしれないと思いました。でも、教会のない祖国に

帰国するときのことが心配でした。」

母国において福音が広まる様子を知らないままエンクツシンが帰国したのは、英語を教え、モンゴル語を学び、福音を分かち合うために6人の宣教師がモンゴルに入国したのと同じ月のことでした。子供たちとデパートで買い物していたとき、エンクツシンは見慣れた姿を目にしました。清潔そうな若い宣教師たちです！「その瞬間、神がわたしを助けておられるのを知りました」と彼は言います。「一人ではないと知ったとき、まさに感極まる思いがしました。」

エンクツシンの妻ドヨディン・ダスケレルと5人の子供たちも教会に入りました。エンクツシンは、教会が政府の認可を受ける過程で重要な役割を果たしてきました。そして1994年の10月、教会はモンゴルで正式に登録されたのです。

大学教授のエンクツシンは、ロシア時代に建築された小さなアパートで大家族を養うのに長年苦労を重ねてきました。ひどいインフレーションのため、国民の平均月収50米ドルではモンゴルの人々が生計を立てるには苦しく、そのうえ高価で品数の少ない輸入品に依存しなければなりません。1994年、新しい自由市場経済のおかげで、エンクツシン夫妻は「デルゲール」と呼ばれる小さな食料品店を始めることにしました。二人の店に買い物に行くと、1.2メートル四方の小さな店内で、復活された救い主の絵がかかった壁を背に、ソーセージやキュウリやトマトを量っているダスケレルの姿を目にするかもしれません。

モンゴルで福音が広まっている様子

は、地元出身の若者が何人か伝道に召されているところにもはっきりと見受けられます。モンゴル出身の宣教師たちは、これまでアメリカ合衆国（カリフォルニア、マサチューセッツ、ワシントン、ユタ、ワシントンD.C.）、韓国、ロシア及びカナダで伝道してきました。

この記事が書かれたときには、マグサリン・バチメグ姉妹がソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアで伝道していました。彼女は祖国を愛し、イエス・キリストの福音が多くのモンゴル人の心に「大きな変化」をもたらすと信じています。「モンゴル人は善良な国民です」と彼女は言います。「とても親しみやすく、善意をもって相手と接する人々です。福音を聞いて教会に入れば、きっと人生がより良いものとなることでしょう。」

バチメグ姉妹は2年前、宣教師から約3か月間レッスンを受け、教会に入りました。モンゴル語を習い始めたばかりの宣教師たちと英語の分からない彼女では、宣教師の言葉を理解するのは難しかったのですが、宣教師たちから直接証を聞いたとき、証してくれた事柄を理解できたとバチメグ姉妹は言います。

彼女は自分で確信を得たいと思いました。そして、それから間もなく自ら福音の証を持つことができたのです。「人生の目的を知らない人が大勢います」と彼女は言います。「若いとき人生に目的がないなど考えられないと思いました。この教会はわたしのすべての疑問に答え、福音はすべてを明らかにしてくれました。」

今、彼女はテンプルスクウェアを訪れる人々と自由に証を分かち合っています。

ます。「福音を分かち合いたいと強く望んでいます。御霊を感じて教会が真実であると知っていながら受け入れない人たちがいるのは悲しいことです。福音の種をすべての人に植えることができればいいのと思います。」

伝道後は、できればビジネスか政治学の勉強を続けたいとバチメグ姉妹は考えています。そして、モンゴルで成長を続ける教会の助けになりたいと望んでいます。「モンゴルでは教会はまだとても新しいので、会員たちは多くの助けを必要としているからです」と彼女は言います。

バチメグ姉妹のような勤勉なモンゴル人開拓者たちの助けによって、教会は確実にモンゴルで成長し発展することでしょう。□



左ページ——ウランバートル支部の姉妹。ホームメイキングの集会でモンゴルの休日に行く伝統的な行事について説明している。

左上——最近バプテスマを受けた会員、タイバン。隣は専任宣教師のホーキンス長老。

右上——若い女性のキャンプに参加した、モンゴルの若い女性たち。

右——マグサリン・バチメグ(左)、とウートナサン・ソヨルマ。モンゴルから召された最初の宣教師。二人ともユタで伝道した。





WHEN THE ANGELS COME, BY CLARK KELLEY PRICE



信仰こめて、 一歩ずつ

名誉幹部
ロバート・L・バックマン



今年、わたしたちはネブラスカ州ウィンタークォーターズからソルトレイク盆地までの開拓者の旅の150周年を祝います。これは同時に、時や場所を問わず教会に自らをささげてきた開拓者たちの、信仰と献身の非常に貴重な伝統を記念するものでもあります。この世界に広がる教会のすべてのワード、支部は、イエス・キリストの回復された福音に生きることを決意した忠実な聖徒たちによって支えられています。この聖徒たちは、正義を擁護し、戒めを守り、福音を分かち合い、キリストについて証し、模範的なクリスチャンとしての生活をするように努力するとき、末日の開拓者となるのです。

この開拓者についての記念行事を教会全体で推進するため、大管長会は150年記念祭委員会を組織しました。昔と今の開拓者の栄誉をたたえる活動を企画するためです。

この1年にわたる記念行事のテー

マは「信仰こめて、一歩ずつ」で、開拓者全員に共通する特質を示したものとなっています。ロゴもこのテーマに添ったもので、財産を手車に載せて道を歩む開拓者の姿が描かれています。委員会はこのテーマが、世界各地のそれぞれの教会員の才能や能力、希望、状況などに合った楽しくユニークでバラエティーに富んだ記念行事を生み出す助けになればと願っています。

教会のすべてのワードとステークに配付された指示によれば、個人や家族、ワード、ステークを単位とする活動が奨励されています。すべての教会員とユニットはこの記念行事を取り入れ、それぞれの地域で最も意義のある、また楽しい活動を幾つか行うように勧められます。

提案されている活動の一つは、美しい音楽の演奏の間に開拓者の日記を朗読するというものです。本誌の22ページから23ページの楽譜は、賛美歌の一つとして歌っ

手車隊の開拓者の一人はこう語っています。「だれが押してくれているのだろうと何度も後ろを振り返りましたが、だれもいません。わたしには分かりました。神の天使がいたのです。」



HANDCRAFT PIONEER STATUE BY TORLIEF KNAPHUS ; MARTIN HANDCART COMPANY, BITTER CREEK, WYOMING, 1856, BY CLARK KELLEY PRICE

たり、コンサート中の聖歌として取り入れたりすることができます。歌詞は記念祭のテーマをよく表したものであり、生活のすべてにわたって示された先祖たちの信仰が強調されています。

主への信仰を示す逸話の中で、1856年の半ばを過ぎてからソルトレーク盆地に向かったマーティン手車隊の決定を、何年も後になって擁護した一人の開拓者の話ほど感動的なものはないでしょう。彼は1856年から1860年までの間にアイオワとネブラスカからユタまで歩いた約3,000人の聖徒たちの一人で、財産を手車に載せて旅をした10隊の一つに属していました。

ある日曜学校のクラスで、不運

に見舞われたマーティンとウィリーの二つの手車隊について、鋭い批判が浴びせられました。災難に遭ったのはソルトレーク盆地への出発が遅過ぎたからだということです。

すると一人の老人が立ってこう言いました。「そのような批判はもうやめてください。あなたがたは事実を何も知らないで批判している。単なる歴史的な事実だけでは……この問題を正しく解釈するこ



とはできないのです。隊の出発が遅過ぎたということですか。そのとおりです。わたしはその隊にいました。妻もです。……わたしたちは皆さんがとても想像できないようなとてもつらい目に遭いました。寒さと飢えのためにたくさんの人が死んでいきました。でも、……わたしたちは、あの極限の状態で、〔神〕をこの上なく身近に感じていたのです。

手車を引きながら、病気と飢えで体が弱ってしまったわたしは、足を前に踏み出すことがなかなかできませんでした。前を見ると砂地の丘のような所があります。わたしは自分にこう言い聞かせました。あそこまでしか行けない。あそこまで行ったらもうやめよう。

「わたしたちは皆さんがとても想像できないようなとてもつらい目に遭いました。寒さと飢えのためにたくさんの方が死んでいきました。……でもわたしたちは、〔神〕をこの上なく身近に感じていたのです。」

とてもあの坂は越えられない。…
…そしてその砂地の所まで行きました。すると手車がわたしを押し出すのです。だれが押ししてくれているのだろうと何度も後ろを振り返りましたが、だれもいません。わたしには分かりました。神の天使がいたのです。

わたしは手車隊に加わったことを不幸だと思ったのでしょうか。いいえ。そのときも、それから今までの年月の中で、一時たりともそう思ったことはありません。わたしたちが神をととても身近に感じるために払った犠牲は、特権として払ったものです。わたしはマーティン手車隊に加わった特権を感謝しています。」(デビッド・O・マッケイ“Pioneer Women” *The Relief Society Magazine* 「開拓者の女性」『扶助協会誌』1948年1月号, p.8への引用)

わたしたちの初期の開拓者は、苦難の火の中で試され、訓練されました。この忠実な聖徒たちがソルトレーク盆地に着くころには、彼らの証と献身は信仰の試しにより強められていました。彼らは神の御心に完全に従順になることの意味を理解したのです。

従う信仰

1847年に開拓者の第1陣が出発してから5年後の1852年8月、大管長会第一副管長のヒーバー・C・キンボールが、テンプルスクウェアの木陰で開かれた大会で、説教壇

に立ち、100人を超える兄弟たちの名前を呼び上げました。世界の中のあまり聞き慣れない国々への伝道の召しでした。彼は事前の承諾のない突然の召しであることへの釈明はまったく行わず、こう言いました。「わたしたちは選ばれた人たちに伝道に行くように申し上げます。二度と帰って来ることがなくとも、行ってください。持てるすべてのものを神の御手にゆだねてください。妻も、子供も、兄弟も、財産もです。」

十二使徒定員会のジョージ・A・スミスは、同じ大会でこう付け加えました。「わたしたちがこの大会で召しを伝える伝道は、一般的にはあまり長期間に及ぶものではありません。家族と別れて生活するのは、3年から7年程度になるでしょう。赴任を拒否する長老がいたとしたら、彼らは妻とともに生活できなくなると思わなければなりません。伝道への召しを断る男性と一日でも一緒にいたいというモルモンの姉妹は一人もいないからです。」(*Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史記録』1852年8月28日, p.1)

召された人々は召しの是非については口にしませんでした。彼らが尋ねたのは「出発はいつですか」でした。

こうした人々をはじめとする初期の宣教師たちの信仰に呼応するかのようになり、たくさんの人々が洪水のように改宗してきました。そして彼らは直ちにシオンへと移住して来ました。未知のもののためにより、信仰を示したのです。小さな船の悪臭の漂う船倉にぎゅうぎゅう詰めになりながら荒海にも

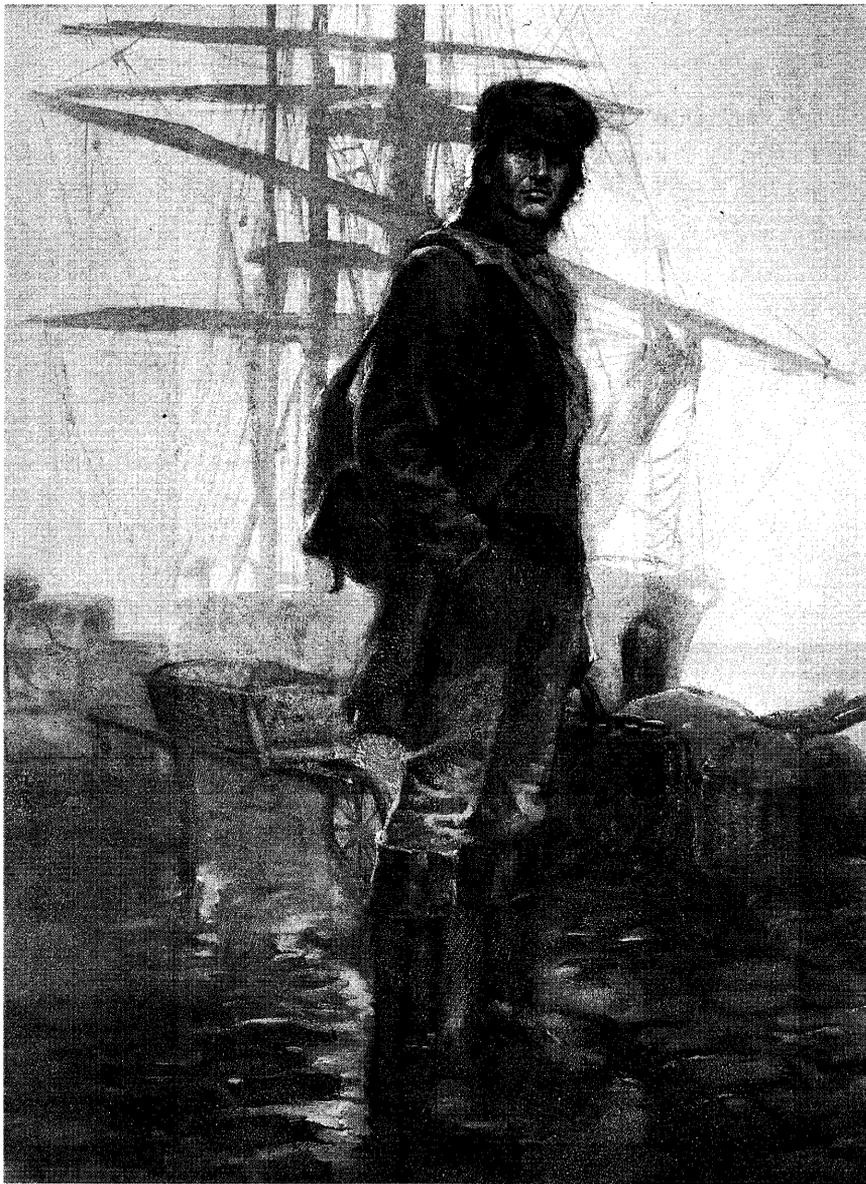
まれ、何週間も何か月もかけて風に吹かれる木の葉のように大海原を旅しなければなりません。にもかかわらず彼らは、ほかの乗客や乗組員に改宗者としての熱意と信仰を示したのです。

そうした船旅の中で興味深いのは、インターナショナル号の航海にまつわる話でしょう。インターナショナル号は1853年2月25日、末日聖徒の移民団425人と大勢のまだバプテスマを受けていない友人や親族、そして26人の乗組員を乗せてイギリスのリバプールを出港しました。

ところが、インターナショナル号は途中で大嵐に遭って航海のスケジュールが遅れ、食糧の給付制限をしなければならなくなりました。4週間で目的地であるルイジアナ州ニューオーリーズまでのわずか3分の1を進んだだけでした。

しかし、雄々しい聖徒たちの信仰と祈りのおかげで、奇跡が起きました。順風が吹き始め、遅れを取り戻せたのです。こうしてインターナショナル号は、54日間の大西洋横断の航海を経て、ニューオーリーズに到着しました。

インターナショナル号に乗り込んだ末日聖徒を管理したのは、クリストファー・アーサーでした。アーサーはイギリス伝道部の部長への公式報告の中でこう述べています。「喜んで報告いたしますが、わたしたちは乗り合わせた人々のうち、3人を除いて全員にバプテスマを施しました。……バプテスマを受けた人々の中には、船長、一等ならびに二等航海士、ならびに18人の乗組員が含まれています。ほとんどの人が直ちにソルトレーク盆地に行くと言っています。…母国を離れて以来わたしたちがバプテスマを施したのは48人で



PROMISED LAND, GLEN S. HOPKINSON

す。」(ウィリアム・G・ハートリー “Voyage on the Ship International” *New Era* 「インターナショナル号の航海」『ニューエラ』1973年9月号, p.9への引用)

繁栄への信仰

中には改宗した地にとどまることによって信仰を示した末日聖徒もいます。教会はそれらの人々を核として後に発展を遂げるようになりました。反対や迫害に直面したときの彼らの試練の物語は、ユ

タへ向かった初期の聖徒たちのそれにひけを取らないぐらい劇的です。彼らはそうした中でも、確固として神の戒めを守ったのでした。

わたしは若いころに北部諸州伝道部で伝道しました。そして1年をオハイオ州クリーブランドで過ごしました。そのころのクリーブランドの教会の支部はとても小さく、パブリック・スクウェアのカーターホテルの一室で集会を行っていました。その支部を構成するのは福音に改宗した数家族でしたが、その人たちは支部の発展にとって、

たくさんの人々が洪水のように改宗してきました。そして彼らは直ちにシオンへと移住してきました。……何週間も何か月もかけて……大海原を旅しなければなりませんでした。

パン種のような存在でした。わたしたちはまた、仕事で合衆国西部から移転して来た幾つかの家族とも親しくなりました。

さて、七十人に召されてからのわたしの最初の仕事は、わたしが前に宣教師として働いたオハイオの地域を監督することでした。そして、クリーブランドに戻ったとき、とてもすばらしい経験をしました。伝道しているころには伸び悩んでいた例の支部のエリアが、今や幾つものステーキを擁するまでに発展していたのです。この劇的な成長の理由の多くは、支部のころの教会員にあります。彼らの強さと信仰がほかの開拓者たちを引きつけ、皆が信仰堅固に教会にとどまったのです。

かつてのチェコスロバキアの一握りの教会員は、打ち続く戦闘と共産主義の嵐あらしの中、何十年もの間信仰を保ち続け、ついに1990年、教会を再び自国に迎え入れることができました。その年月の中の14年近くは、公の場での礼拝を禁じられ、チェコの国境を越えての教会との接触は許されず、沈黙の信仰を余儀なくされました。そうした聖徒たちの中にアナ・ルカソバがいます。彼女は教会との接触を45年断たれていましたが、什分の一は忠実に蓄えておきました。もう一人はオタカル・ボイクブカです。彼は長期にわたる共産主義支配の間、チェコの聖徒たちを団結させるとともに、陰でいろいろな方法を駆使して福音を教え、大勢

の若人を教会の教えに改宗させました。(バーノン・L・ヒル「45年分の什分の一」『聖徒の道』1994年12月号, p.8; カーリレ・メフル“Czech Saints: A Brighter Day” *Ensign* 「チェコの聖徒たち、輝かしい日」『エンサイン』1994年8月号, pp. 46-52)

現代の信仰

開拓の時代は終わったわけではありません。今日、わたしたちの中にはたくさんの開拓者がいます。わたしは世界の至る所で、先祖たちと同じ揺るぎない信仰と勇気を示している現代の開拓者を見てきました。彼らは教会を世界的な組織にまで高め、聖文や預言者の預言が成就されることになりました。イエス・キリストの福音を信じてバプテスマを受け、王国に入る人々は、開拓者なのです。

オハイオ・アクロステークのシャロン・ブラッドリーは成長した自分の娘の言葉を引用しながら、その開拓者の精神について説明してくれます。「皆さんの中には7月24日に開拓者の伝統をお祝いする方々がいらっしゃると思います。ぜひそうすべきです。わたしの子供やそのまた子供は、1974年11月19日のことを決して忘れないでしょう。それはわたしの両親がバプテスマを受けて、開拓者の血がわたしたちの血管に流れ始めた日だからです。」(“Pioneer Since 1974” 『1974年からの開拓者』『エンサイン』1988年7月号, p.27)

さて、たとえ世界的な教会であっても、孤独の中で、あるいは家族や信仰を共にする人々の援助を受けられないという状況の下で、揺るぎない信仰を示す人がいます。

ロバート・ムーヒラはエジプト

のカイロで働きながら学校に通っていたときに教会に入りました。長老に聖任された彼は、アフリカ、タンザニアにある生まれ故郷の村に帰りました。家族に福音を分かち合えると思ったのです。ところが不幸なことに、彼の家はいちばん近いダルエスサラームの支部からでも960キロ離れていました。ほかの教会員からはまったく孤立した状態でした。6か月間聖餐を受けずに過ごした彼は、伝道部長に毎週独りで聖餐の儀式を行う許可を求めました。その申請は許可されました。

日曜日になるとロバートは、一緒に礼拝をするように家族を誘いました。しかし家族は自分たちの教会に集う方を選びました。そこで彼は自分で礼拝をしました。独りです。彼はこう言っています。「まず聖餐用の水とパン、そして手を清める水と小さなタオルを用意します。独りで声を出して賛美歌を歌います。賛美歌は自分のものを持っていました。その後で開会の祈りをささげ、独りだけでビジネスはありませんから、聖餐の歌を歌って聖餐の準備に入ります。それからひざまずいて祝福して、聖餐を頂き、いつもしているように聖餐の後は布で覆い、自分で話を、つまり証あかしをします。そして日曜学校のように歌を歌ってから『福音の原則』を読みます。それから、いったん祈りで会を閉じ、次は神権会を開きました。賛美歌を歌って祈り、『メルキゼデク神権者用個人学習ガイド』から選んだレッスンを勉強しました。それからもう一度賛美歌と祈りで会を閉じました。」(E・デール・ラバロン「アフリカの福音の開拓者」『聖徒の道』1994年5月号, pp. 42-44)

確かに、ロバート・ムーヒラは開拓者です。

信仰についてのわたしたちの伝統

今日わたしたちが恵みとして受けている圧倒されるような信仰という伝統と、わたしたちの開拓者である先祖の犠牲により受けている豊かな祝福に思いをはせるとき、わたしは、親たちが40年間荒れ野でとどまった後によく約束の地に入ったイスラエルの子らへの主のメッセージが、もっとよく理解できるように思います。主は民に対して、エジプトから逃れるときに彼らが受けた偉大な奇跡と祝福のことを思い起こさせ、ヨシュアを通してこう言われました。「そしてわたしは、あなたがたが自分で労しなかった地を、あなたがたに与え、あなたがたが建てなかった町を、あなたがたに与えた。そしてあなたがたはいまその所に住んでいる。あなたがたはまた自分で作らなかったぶどう畑と、オリブ畑の実を食べている。」(ヨシュア24:13)

西部移住100周年記念の年である1947年の総大会の感動的な説教の中で、大管長会のJ・ルーベン・クラーク第一副管長はわたしたちにこう警告しています。「わたしたちは自らの人生を歩むうえで次のことを忘れないようにしたいものです。すなわち、[開拓者]であったわたしたちの先祖たちの行いは彼らのものであり、わたしたちのものではないということです。彼らの働きの栄光をわたしたちに帰することはできません。業を行ったのは彼らですから、わたしたちは何の誉れも地位も受けられません。わたしたちは自らの働きによって昇栄しなければなりません。その働きが足りなければ、わたしたちは昇栄できません。先祖の人柄や働きに頼ってはい、い

かなる榮譽や報酬や尊敬も、また特別な地位や称賛や信望も得られません。どんな報いも榮譽も称賛も、わたしたち自身の行いにかかっているのです。」(Conference Report 『大会報告』, 1947年10月, p.160)

しかしながら、開拓者の精神は信仰を受け継いだわたしたちの中に脈々と生きています。わたしたちこそ彼らの最も洗練された記念碑です。わたしたちの肩には、彼らが手がけた業を遂行するという祝福が置かれています。彼らの信仰の上に御業を築き上げるのです。

犠牲への信仰

奉仕への召しを受け入れる男女の姿を見るにつけ、わたしは日々、変わる事のない信仰への証を実感します。そこに信仰の試しがあるからです。わたしたちは開拓者の先祖たちのような物理的な犠牲は求められないかもしれませんが。むしろ、わたしたちの福音への献身についての試しは、わたしたちの内から来ます。わたしたちは福音の律法に従順であることを態度で示すとともに、喜んで犠牲をささげること、奉仕の召しを受け入れることによって、また質の高い奉仕を行うことによって、それに福音に忠実な生活を送ることによって示すのです。

わたしはこれまで、同胞への奉仕の業に召された現代の開拓者たちが、個人的な犠牲を払ってその召しにこたえる姿を度々目にしてきました。自らを進んで差し出す彼らの姿には言葉に尽くせないほどの心を打つものがあります。

ある忠実で献身的な夫婦は、宣教師訓練センターにおいてフルタイムで奉仕するように求められた

8人家族のパラグアイの開拓者たちは、バス代が払えないために、毎週日曜日いちばん近い支部までの往復10キロの道のりを歩いて通いました。

とき、それまで何年も家や家族のもとを離れて伝道地や神殿で奉仕の業を行っていたにもかかわらず、こう答えました。「主が望まれる所なら、どこにでも行く準備ができています。」

わたしは伝道部長をしていたとき、一人の兄弟を伝道部内の地方部を管理する責任に召しました。召しを受け入れた後でこの新しい地方部長は、もしこの召しが仕事に支障を来すようであればどうしますか、という質問を受けました。すると彼は少しもためらうことなく、ほかの仕事を探します、と答えました。こうした男性、女性は現代の開拓者です。

大きな責任でも小さな責任でも、人知れず謙遜に、忠実に主に従い最後まで堪え忍ぶとき、わたしたちは開拓者になることができます。パラグアイの忠実な姉妹イエニ・フィグレドと彼女の家族について考えてみましょう。彼女たちはいちばん近い教会の支部から5キロ離れた所に住んでいました。「『8人家族でしたから、バスの運賃は相当な額になります』と長女のイエニ姉妹は言います。今では彼女も4人の子供の母親で、ご主人のグレゴリオ・フィグレド兄弟はステーキ会長を務めています。『ですから、いつも片道2時間かけて、歩いて教会に通っていました。土曜日の初等協会と青少年の活動にも同様に通いました。当時、日曜の集会は午前と午後に分かれていましたの

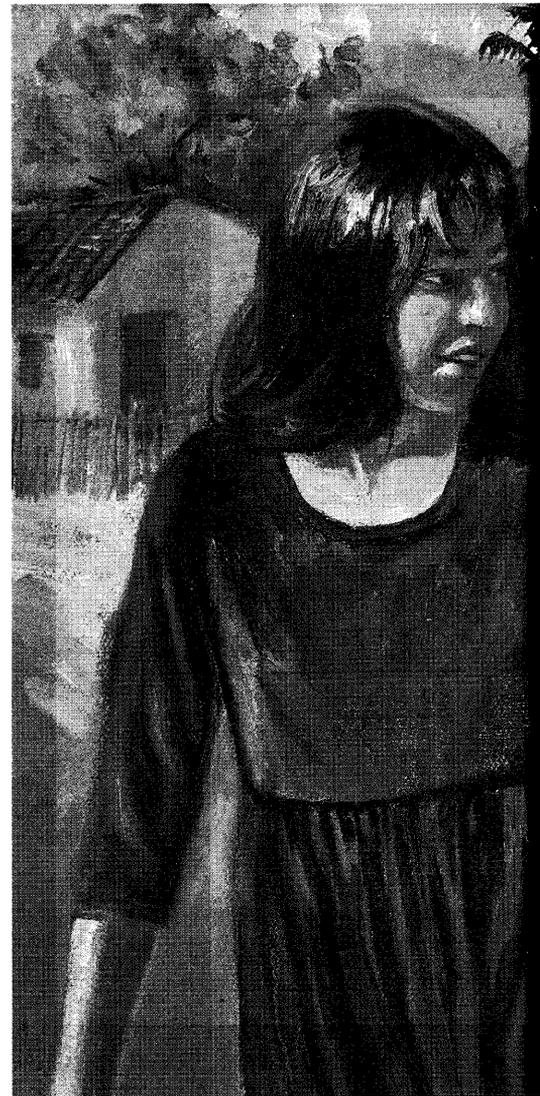


ILLUSTRATION BY GLEN S. HOPKINSON

で、1日2往復、合計20キロ歩いたことになります。暑い盛りには、お弁当を持って行き、集会和集会の合間に木陰に座って食事をしたこともありました。バプテスマ以来、集会を欠席したことは一度もなかったと思います。』(『パラグアイの開拓者たち』『聖徒の道』1993年9月号, p.11)

信仰の証としてすべてを、命さえ犠牲にしようという教会員の志は、日々いろいろな形で示されています。しかしそれがあまりにも静かに行われているため、その信仰や雄々しい行いにだれも気づかないことがよくあります。



数年前に伝道管理部の管理部長をしていたときのことで、二人の優秀な宣教師がボリビアで、心ないテロリストによって命を奪われました。当然のことながら、この悲劇に両親や家族は悲しましました。二人の宣教師、トッド・R・ウィルソン長老とジェフリー・B・ボール長老の遺体は、埋葬のためにアメリカに送られました。ボール長老の葬儀の後で一つの記事が『チャーチニュース』(Church News)に出ました。その中に次のような一節があります。

「母親の話によると、ボール長老は伝道地に向けてたつ前、『帰還

するときに自分はベストを尽くしたという気持ちになれなかったらほんとうに嫌だろうね』と言っていたそうである。二人の長老は自分たちが主の業のために命をささげることになるとは知らなかったであろうが、それぞれの両親は、『息子はまさにベストを尽くした』と感じている。

それだけでなく、ボール長老の父親は、『息子はたとえこのような結末を迎えることを知っていたとしても召しを受けていたでしょう』と語っている。『わたしにとっても信じられないことなのですが、正直な気持ち、わたしも行かせると

思います。』(R・スコット・ロイド“Elder Ball Touched Lives for Good”「人々の心に善を植え付けたボール長老」『チャーチニュース』1989年6月3日付け, p.14)

無私の心で奉仕し合い、神のすべての子供たちと福音の豊かさを分かち合い、日々福音の光と真理の中で生活するわたしたちはすべて、この信仰という伝統を守る開拓者です。そして今はなき先人たちとともに、わたしたちは信仰こめて、一歩ずつ歩いていくのです。主イエス・キリストに従いながら。

□

信じ,

熱意を込めて。♩ = 72-84

1. ひ と の こ ら す く う み わ ざ い
2. ち え と ゆ め を も ち み わ ざ ひ
3. か り い れ の の ぞ み も ち て み



ま よ に は じ ま る こ こ ろ と ち か ら
ろ め ゆ く せ い と お も い と ち か ら
わ ざ に つ く も の ち か ら を つ く し



を つ く せ み わ ざ に つ く も の よ
つ く し て ひ か り の み ち ゆ け ひ
て し ろ き は た け に は た ら け す



げん しゃ と み つ か い と も に み ち を す す
く く へ り く だ り と く と し ん こ う し め
く い を て ん よ り う け ん しゅ の ひ か り



進まん



むし しゅ はい す べ て を お さ め め
 を あ つ い み と が な く か み の ほ さ

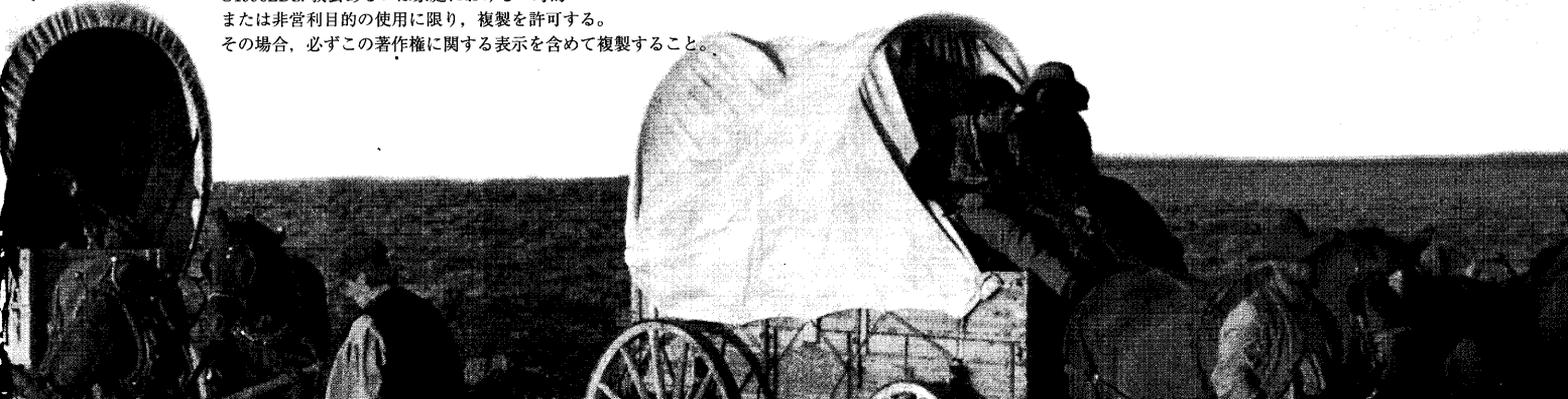
ぐ み た も う
 ろ ほ た し い く し ん じ す す
 か え う け ん

ま ん しゅ に し た が い しゅ
 ま ん

の あ い の ぞ み に う た を う た わ ん

詞と曲：K・ニューエル・デイリー（1939-）
 ©1996LDS. 教会あるいは家庭における一時的
 または非営利目的の使用に限り、複製を許可する。
 その場合、必ずこの著作権に関する表示を含めて複製すること。

教義と聖約4章



最善の賜物を求める

中央扶助協会会長会

1997年の家庭訪問メッセージは、「熱心に最善の賜物を求め〔なさい〕」(教義と聖約46:8)というテーマに基づいています。わたしたち中央扶助協会会長会は、教義と聖約第46章を研究し、皆さん自身と皆さんが愛し仕える人々に対するすばらしい約束を受けるようにお勧めします。

霊的な賜物とは何でしょうか

天父は、よく「霊的な賜物」と呼ばれる特別な祝福を受ける機会を、わたしたちに与えてくださっています。この特別な賜物は、才能や家族のつながり、あるいは専門的な教育など、わたしたちに与えられたほかの多くの祝福とは異なっています。この霊的な賜物は非常に大切なものなので、救い主はそれを熱心に求めるように強く勧めておられます。そのような賜物の中には、証、知恵、知識、癒される信仰、識別などがあります。天父は、わたしたちが天父の戒めに従い、聖約を守るときに、これらの賜物を与えてくださいます。

す。これらの賜物はわたしたちの霊性を高め、「すべての人がそれによって益を得られるように」(教義と聖約46:12)ほかの人に奉仕するために与えられます。

これらの霊的な賜物をすべて持っている人はほとんどいません。しかし、教会員ならだれでも、少なくとも一つは持っています(教義と聖約46:11参照)。

霊的な賜物を求めてそれを受けるには

わたしたちの多くはすでに霊的な賜物を持っています。しかし、それに気づかないことがあります。特別な必要のある人や召しを受けた人だけに与えられていると思いがちです。同じ理由で、わたしたちは霊的な賜物を与えられると約束されているにもかかわらず、それを熱心に求めるのを怠ることがあります。救い主はわたしたちにこう言われました。「あなたがたはすべてのことについて、惜しみなく与える神に願い求めるように命じられている。……それは、わたしを求める者たちや、わたしに願い求める者たち……のすべてが、益を得られるようにするためである。」(教義と聖約46:7, 9)

第46章の中で主は、霊的な賜物を受けるための、6つの条件を挙げておられます。(1)それは、しるしとして求めてはならない(9節参照)、(2)ほかの人の益となるように用いられる(12, 26参照)、(3)「キリストの名によって」用いられる(31節参照)、(4)「与えられる祝福が何であろうと」神に感謝をしなければならない(32節)、(5)「絶

えず〔主の〕前で徳高く聖くなければならぬ。」(33節)

第6の条件は、「御霊によって」(30節)求めることです。ブリガム・ヤング大管長は、預言者ジョセフ・スミスの殉教の後、聖霊を伴侶とすることの大切さについて預言者からメッセージを受けました。「謙遜で忠実であり、主の御霊を常に伴侶とするように兄弟たちに告げなさい。そうすれば、道を誤ることはないであろう。静かな細い声を聞き逃さないように注意しなさい。その声は何をすべきか、またどこへ行くべきかを教えてくれるでしょう。兄弟たちに、常に強い信念を持つことを心がけるよう教えてください。そうすれば、聖霊の訪れを受けたとき、すぐそれを受け入れられるでしょう。主の御霊はそのほかの霊と区別することができます。それは心に平安と喜びを与えるささやきです。悪意や憎悪、争いなどすべての悪を心から取り除き、善を行うことを心から望むものです。」(Juvenile Instructor『ジュベニール・インストラクター』1873年8月号, p.114)

御霊の賜物は聖霊を通してもたらされます。わたしたち中央扶助協会会長会は、教会の姉妹たちがこれらの賜物に心を開き、それを熱心に求め、それを受けるにふさわしく生活し、すべての人々を益するためにそれを用いるよう、心から祈っています。

●霊的な賜物はなぜそれほど大切なのでしょうか(教義と聖約46:7-9参照)。

●霊的な賜物は、皆さんの生活やほかの人の生活にとってどのような祝福となっているのでしょうか。□



どうしたら、心の中から悪い言葉を 一掃できるでしょうか

質問—不敬な言葉や悪い言葉を、学校やそのほかの場所で毎日のように耳にします。わたし自身は口には出しませんが、そのような言葉を頭に思い浮かべることがあります。どうしたら、心の中から悪い言葉を一掃できるでしょうか。

本誌の答えは、問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

回 答

悪い言葉を使わないように努力しても次から次に心に思い浮かんでくるとき、わたしたちはめいってしまいます。しかも残念なことに、心の中に浮かんだそのような悪い言葉は、時として口からこぼれ出てしまうことがあります。

読者からの提案の中でいちばん多かったのは、二つの異なることを同時に考えることはできないので、悪い言葉が心に思い浮かびそうになったら、賛美歌や初等協会の歌、あるいは暗唱聖句といった良い思いで心を満たすというものでした。

悪い言葉の中で最も恥ずべきなのは、主の御名をみだりに唱える言葉です。天父と御子イエス・キリストは、わたしたちが最も深く敬意を表すべき御方です。

教会の会員としてわたしたちはイエス・キリストの御名を我が身に引き受けます。これは、わたしたちが行いと言葉において救い主を代表するということです。わたしたちの語彙の中に神を冒瀆する言葉や粗野な言葉の入る余地はないのです。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は次のように勧告しています。「言葉遣いの面でも清くあってくだ

さい。今日、あまりにも汚れたくだらない言葉遣いはびこっています。……そのような言葉遣いをするのは、自分の気持ちを表現するのに『言葉の下水』にまで降りて行かなければならないほど、語彙が極端に貧困だということを表しているにすぎません。……心が汚れていれば、汚れた不敬な言葉を自然と使うようになります。しかし、心が清ければ、言葉遣いの面では前向きで心を高める言葉を用いるようになり、行動面でも、心に幸福をもたらすような行いをするようになります。」（「わたしは清く、汚れがありません」『聖徒の道』1996年7月号, p.58）

わたしたちの接する人々の中に主の御名をみだりに唱える人がいたら、そのような言葉は好きではないと伝える必要があります。



たいてい、そのような言葉を用いる人というのは、深い考えもなしに口に出しているものです。恐らく不敬な言葉遣いをする人の中で育ち、ほとんど無意識のうちに悪い習慣が身に付いてしまったのでしょう。しかし、そのような人の多くは、自分たちの習慣についてはっきり指摘されると、できることならやめたいと言っています。もし一緒にいることの多い人であれば、良い言葉遣いの模範を示したり、ほかの言い回しを使うことを勧めたりすることで、このような習慣を捨てる手伝いができます。この種の提案をするときには、ユーモアの精神を忘れず、相手が傷つかないように思いやりのある言い方を心がけなければなりません。

また悪い言葉を使うようなテレビ番組や映画を避けることにより、悪い言葉からわたしたちの心を守ることができます。残念なことです。下品な言葉を聞けば聞くほど、それらの言葉から受ける不快な印象は薄れていくようです。

自己改善のためのあらゆる試みと同様に、自らの思いを清めるうえでも、わたしたちは天父に助けを祈り求めることができます。もし天父に対する信仰を行使し、悔い改めるために最善を尽くすならば、「全能の主の御霊……は、わたしたちが悪を行う性癖を二度と持つことなく、絶えず善を行う望みを持つように、わたしたちの中に、すなわちわたしたちの心の中に大きな変化を生じさせてください」(モーサヤ5:2)。

読者からの提案

救い主の教えに熱心に従がおうとすればするほど、試練も大きく

なるものです。ただわたしたちに試練が与えられるのは、失敗するためではなく、誘惑や悪に打ち勝つためです。もしわたしたちの心の中から悪い言葉をすべて取り除くことができれば、代わりに真理と平和の言葉を与えられ、勝利を得ることができます。



スウェーデン、ストックホルムステーキ、ウレプロ支部
エリック・マッツソン
(21歳)

断食し、祈り、教会やセミナー、ファイヤサイドに出席することを通して、正しい優先順位を定めるなら、汚れた思いを捨てられます。ダビデ王の言葉を思い出してください。「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。」(詩篇119:105)



サモア、アピア東ステーキ、レバーレワード
ポウオノ・ラメコー長老
(21歳)

汚れた言葉を耳にしたら、イエス・キリストの次の教えをいつも思い起こすことです。「あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。」(マタイ12:36)



グアム・ミクロネシア伝道部
ジョエル・T・ラプティック長老
(20歳)

下品な言葉はわたしの霊とわたしを愛してくれている人々を傷つけます。優しい言葉はほかの人を幸せにするだけでなく、自分自身について良い気持ちを感じるのに役立ちます。「こちよ言葉は蜂蜜のように、魂に甘く、からだを健やかにする。」(箴言16:24)



ペルー、リマ・サンルイスステーキ、エルポルベニールワード
ロザーナ・ジュールペ・フランコ

汚れた言葉を耳にしたときには、天父と交わした聖約を思い起こし、その言葉を忘れることができるよう助けを祈り求めます。

汚れた言葉を思いから消し去るための個人的な目標を立て、聖霊の導きを受けられるよう祈り求めることです。そうすれば、「賢くて……自分の導き手として聖なる御霊を受け」るでしょう(教義と聖約45:57)。



フィリピン・ダバオ伝道部
ランディ・フェルナンド長老

わたしたちは選択の自由によって、どのような思いを持つかを決めます。もし心の中で悪い言葉を使う癖があるならば、選択の自由を働かせて、今すぐにその癖をなくし、代わりに清い思いで心を満たす癖を作ることです。そうすれば、わたしたちの重荷は軽くなります。



サモア、アピアステーキ、
マアングアンギワード
エリア・バセンガ
(22歳)

思いは行動となります。したがって悪い思いが心に浮かんだときの最善策は、その思いがどこから来ているかをつきとめ、この出所から遠ざかることです。ほかに適当な言葉がないのですが、わたしたちには悪い思いを捨てるのに役立つ、「悪との戦いの賛美歌」というものがあります。また自分が何者なのかを思い起こすために祈りをささげることもできます。



アルゼンチン、
ブエノスアイレス、
バンフィールドステーキ、
パルケパロンワード
パリス・ゴイエネチエ
長老

どのような言葉を使うかはわたしたちが自分の思いをどう訓練し、自分自身についてどんなイメージを抱いているかにかかっています。もしそのイメージが否定的なものであれば、自分に対する価値観を高めるべきです。そうすれば自信や勇気、信仰を持つことができ、不敬な言葉を使うという誘惑に負けることなく、人生で経験する逆境に立ち向かうことができます。チリ、サンチャゴ・コンチャリストーク、コンチャリ第11ワード
ホセ・オセス

わたしは警察官ですが、下品な冗談や不敬な言葉を常時耳にしま

す。そんなとき、わたしは話題をもっと肯定的なものにそらしたり、仕事に集中したりすることで悪い思いを抱かないように心がけています。

わたしの置かれている立場上、職場の同僚たちにわたしの標準を知ってもらうのは大切なことです。そうすることによって尊敬され、彼らもわたしの前では不快な言葉を口にしなくなります。



ブラジル、ピトリア・ダ・
コンキスタ地方部ピトリア・
ダ・コンキスタ第1支部
ロビンソン・ログリオ・フ
アリア・ドス・サント
(29歳)

悪い言葉をやめるのは容易ではありませんが、もしわたしたち一人一人に対する天父の限りない愛を思い起こし、やめるために精いっぱい努力をするならば、数週間後にはそのような言葉を使おうという気さえ起こらなくなります。



オランダ、アベルドーン
ステーキ、アマーズフ
ォートワード
モイゼス・アモロチヨ
(26歳)

わたしたちの思いがわたしたちの人格を築きます。わたしたちはイエス・キリストのような人格を築くべく努力をしなければなりません。ですからイエス・キリストのような思いを持たなければならないのです。主は荒野で3つの誘惑に遭われたとき、即座に御自身が覚えておられた適切な聖句を用いてサタンを退けられました。わ

たしたちも誘惑を退けるのと同じ方法を用いることができます。

ブラジル、オサスコステーキ、イタペビ支部
エリサンジェラ・ダ・シルバ・オリベイラ
(17歳)

*

下記の質問に対する皆さんの意見をお待ちしています。締め切りは1997年4月1日です。あて先は下記のとおりで。

QUESTIONS AND ANSWERS

International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150
U.S.A.

氏名、住所、年齢、所属ステーキ／地方部、ワード／支部名を明記のうえ、日本語で意見をお寄せください。手書き、ワープロ、いずれでもけっこうです。できれば写真を同封してください。ただし返却は致しかねます。内容が個人的なもの、あるいはとても内密なものである場合、匿名扱いにすることもできます。わたしたちは届いた意見の中から代表的なものを選んで掲載しますので、すべての意見が掲載されるとは限りません。

質問——自分の家族は何代前から教会に属していたかということをおぼろげに話す人がいます。わたしは改宗者です。教会の開拓者だった人々と関係があるのは、ほんとうに大切なのでしょうか。□

新任教師のための助け

中央初等協会会長
パトリシア・P・ピネガー

わたしは中央初等協会会長として各地を訪問し、多くの聖徒に会ってきました。教会に入ったばかりの人もいますが、皆自分の知っているかぎりの最善を尽くしてそれぞれの召しを果たそうと努めています。わたしはしばしばこう自問します。「どうしたら、これらの善良な人々を助けられるだろうか。新任の教師や指導者を強めるには、どうしたらよいだろうか。」そこで、わたしたちのだれもが役立てられる5つの方法について考えてみました。

祈り——祈りはわたしたちの最も大きな助けであることを証します。天父と心から語り合うわたしの最も好きな時間の一つは、ユタ州プロボにある自宅からソルトレーク・シティーの教会本部へ行く時です。このひとときに自分の召しを果たすうえで助けとなるすばらしい霊的な経験を幾つかしました。指導者や教師は皆、祈りを通して各自の召しを果たすための重要な助けを得られることをわたしは確信しています。

聖文の勉強——聖文は必要な助けとわたしたちの疑問に対する答えを与えてくれます。ある日、わたしは苦痛と破壊性に満ちたこの世について深い悲しみを感じ、どうしたら子供たちをより良い方向に感化できるだろうかと考えていました。すると、希望を与えてくれる聖句を見つけました。イザヤ書第11章9節です。「彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。」

この聖句は福千年について書かれたものですが、どうしたら子供たちをより良い方向に感化できるだろうか、というわたしの疑問に対する力強い答えであったと信じています。初等協会や家庭は、「主を知る知識」に満ちあふれるとき、子供たちに対するより大きな助けとなれるのです。

絶えず聖文を勉強するならば、知識を増し、福音の原則を理解できるようになるだけでなく、慰めも得られます。

手引きと参考資料——手引きは教会の召しを果たすうえで大切な資料です。手引きや参考資料を研究してください。皆さんの召しに関して、手引きに書かれている事柄に精通してください。教会配送センターから入手でき

るそのほかの教師用資料について調べてください。

評議会——評議会で神権指導者たちに相談することは、教会の召しを果たすうえで貴重な助けとなります。1953年に大管長会第一副管長であったステイブン・L・リチャーズ長老はこのように述べています。「わたしは何のためらいもなく、確信をもって言うことができます。皆さんが期待されているとおりに評議会で話し合うなら、神は皆さんが抱えている様々な問題を解決できるようにして下さる。」(M・ラッセル・バラード「評議会の力」『聖徒の道』1994年1月号, p.85に引用)

評議会は、規定どおりのワードやステーク評議会にとどまらず、もっと多くの場所で開かれます。会長会や指導者会、家庭でも行われます。評議会は互いの意見に耳を傾け、懸念している事柄について話し合う所です。また、問題を解決し、助け合うための計画を立て、実行する所です。

御霊の働き——時折、新任の教師は自分が御霊によって教えているかどうか分からないことがあります。御霊の働きを自覚するにはどうしたらよいでしょうか。御霊はいろいろな方法で現れます。胸が熱くなったり、混乱が収まり心に平安がもたらされたり、善を行うように導いたり、喜びで心が満たされたり、信仰や愛をもたらしたりします(教義と聖約6:23; 9:7-9; 11:12-13; ガラテヤ5:22-23参照)。また、御霊は生徒の必要やレッスンのどこを強調すべきかを教師に教えてくれます。

教えているときに、以上の気持ちを感じたり、生徒が善を行いたいと望むのが分かったり、クラスに平安や愛、喜びが満ちるのを感じたりしたなら、そのような気持ちについて生徒に話してください。若い人々が自分の生活の中で御霊の力を識別できるように助けてください。それは彼らにとって力強い祝福となるでしょう。

以上の助けはどれも皆、教師や指導者が各自の技能を磨き、教会の召しをよりよく果たせるように備えるとき、役立つことでしょう。そのように行うとき、天父はわたしたちを祝福し、強め、子供たちを祝福する方法をわたしたちの思いと心に告げて下さるでしょう。□

(1995年3月初等協会オープンハウスの説教から)



12 y Alma 11:20-28
 13 y Alma 12:1-9
 14 y Alma 12:10-22

試練には必ず 目的があります

エディマール・ボテロ・スペルティ

愛する夫のギルベルトは、1991年にブラジル、ポルト・アレグレのトラック事故で亡くなりました。彼の死はわたしにとって大きな衝撃でした。わたしたちはそれまでずっと健康で、幸せに暮らしていました。事故の少し前に、ギルベルトのパプテスマを喜び合ったばかりでした。残された家族のヒセレ、パブロ、わたしの3人は、以前に教会に加入していました。

悲しいことですが、わたしも子供たちも、夫を失った心の痛手を、そう簡単には克服できませんでした。多くの月日が流れましたが、わたしたちの痛みや、なげやりな気持ちを和らげてくれるものなどどこにもないように感じていました。

その後、必要な書類がないために、夫の保険金が下ないことが分かりました。債務の支払いができず、家や家具をすべて手放さざるを得なくなりました。3か月後、小さなマンションを購入することはできましたが、何をもってもわたしたちの気力を取り戻すことはできそうにありませんでした。

わたしたちはそのマンションで、ともつらい3年間を過ごしました。わたしは学校に勤めていましたが、月日がたつほど嫌げがさしてきました。子供たちも学校で問題を抱えていました。教会の会員であるという理由で、ほかの生徒たちからいじめを受けていたのです。生活は向上するどころか、もっと耐え難いものになっていくように思えました。わたしたちは希望を失い始め、教会に行くことさえやめてしまいました。

しばらくたって、わたしたちはほかの州にある町に移ることにしました。フロリアノポリスに引っ越すことで、悲しみを忘れ去ることができるのではないかと感じていました。

わたしたちは、アパートを売ったわずかばかりのお金を持ってやって来ました。でも、何もかもがとても高く、すぐに途方に暮れてしまいました。その後、1994年の復活祭の休暇中に、イングリッシュ・ビーチという所にある新しい家を見に行きました。それはほんの好奇心からで、そこが気に入るなどとは思ってもみず、ましてやそれが天父がわたしたちのためにとっておかれた祝福であろうことなど分かるはずがありませんでした。

わたしたちはその家に到着すると、持ち主に会いました。その男性はアルゼンチン出身で、母国に戻る必要に迫られていました。彼は即金なら、幾らでも売る用意がありました。それはすてきな家でとても広く、美しいものでした。そのすばらしい祝福にわたしたちはひざまずいて、天父に感謝しました。天父に信仰のなかった自分たちを恥ずかしく思いました。でも、その家は祝福のほんの始まりにすぎなかったのです。

2か月後、わたしたちはその地区で、末日聖徒の宣教師と出会い、集会が開かれている場所を知りました。すぐにわたしたちは定期的に教会に集うようになりました。会員たちはわたしたちのことをとても気にかけてくれました。彼らはわたしたちが大きな家族、つまり末日聖徒イエス・キリスト教会

という一つの家族の一員であることを、様々な面で示してくれました。日を追うごとにわたしたちは幸せを感じられるようになりました。

2、3か月後、春の到来とともにその町全体で建物の賃貸料が値上がりし、支部が借りていた建物も高すぎて、そこにとどまるのが厳しくなりました。それで、支部はわたしたちの家で集会を開くことになりました。わたしたちは支部の会員に自宅を開放し、支部の兄弟姉妹は、わたしたちに心を開いてくれました。

わたしたちがフロリアノポリスへ引っ越してきたとき、会員はわずかでした。今ではわたしたちの小さな礼拝堂はいっぱいです。二人の子供たちはステーク宣教師に召されています。わたしはオルガン伴奏者として奉仕するとともに、扶助教会の教師もしています。現在、わたしたち家族は、サンパウロ神殿で結び固めを受ける準備をしています。

最も困難な時期であったとしても、試練には必ず目的があります。それが今のわたしにははっきりと分かります。わたしたちはイングリッシュ・ビーチに来る必要があったのだ、と今は実感しています。あのものが続けた日々を通じて、主の業を行う以上に偉大な幸福はないことを学びました。夫はわたしたちのもとから取り去られましたが、天父はわたしたちを見捨てたりはされないことを、今、確信しています。天父はいつもわたしたちに必要な助けを与え、祝福してくださるので、す。□



左—スベル
テ
イ姉妹。
下—スベル
テ
イ姉妹の二
人の子供、
パブロと
ヒセレ。

信仰の

R・バル・ジョンソン

今年教会は、1847年に遂げられた偉大なモルモン開拓者の旅を記念する150周年祭を祝います。しかし、末日聖徒の開拓の歴史は1847年より何年も前に始められていました。実際、末日聖徒の最初の開拓者は預言者ジョセフ・スミスでした。ジョセフ・スミスは、1820年に永遠の真理を求めて、森の木々の中でぬかずいたときに、イエス・キリストの福音を回復するための道を開いたのです。

御父と御子の訪れを受けたというジョセフの証^{あかし}を信じた人たちもまた開拓者でした。彼らはアメリカ合衆国のニューヨーク州で教会の礎^{いしずえ}を置きました。そして迫害によって、ニューヨーク州を追われたとき、彼ら

はオハイオ州で再び教会を確立しました。それはさらに、ミズーリ州、そしてイリノイ州でも繰り返されました。

預言者ジョセフ・スミスが1844年に殉教の死を遂げたときには、教会の基は確固としたものとなっていました。しかし、一つ欠けていたものがありました。迫害の恐れがなく、成長している恒久的な中心地がまだなかったのです。そのために、再び迫害が起こったとき、聖徒たちはまた住み慣れた地を離れ、ロッキー山脈への長い旅を始めたのでした。

次ページ以降の本稿の記事は、その旅のすばらしい結果をたたえるもので、ニューヨーク州の森で昔あった出来事が起点となっています。掲載されている写真は、ソルトレーク・シティ

一のジョセフ・スミス記念館で訪問者のために上映されている教会制作の映画『レガシー』（『われらの遺産』）のロケーション中に撮影されたものです。また、それらの写真に加えて、同映画に描かれたのと同じ時代に同じ場所にいた開拓者たちの数々の言葉が紹介されています。これらの言葉と写真を通じて、昔の開拓者から受け継いでいる遺産をわたしたち皆が思い起こす助けとなるように、心から望んでいます。また、その遺産への思いを新たにすることにより、現代に生きる教会員が、昔の聖徒たちの足跡に倣い、全世界に神の王国を築いていくうえで各自に求められるいかなる召しをも果たしていく決意をさらに固いものとするように願っています。

ロッキー山脈へと、信仰の道を切り開いた

遺産



オハイオ州

ニューヨーク州

右—映画『レガシー』（『われらの遺産』）より。主人公エライザ・ウィリアムズは、少女のころ、ジョセフ・スミスからもらった『モルモン書』を読み、1830年にニューヨーク州北部でこの教会の会員となりました。

教会は1830年4月6日に、ニューヨーク州フェイエットにおいて組織されました。そのときの集會に集った56人の友人、信徒の中に、デビッド・ルイスという11歳になる少年がいました。デビッドは後になって、こう書いています。「[その集會の後で] わたしは家に戻り、母に自分をその教会に入れたいと思っているのかと尋ねた。」

それを聞いて母親は「どの教会のこと？」と聞き返しました。デビッドが末日聖徒イエス・キリスト教会のことだというと、母親が言いました。「そうよ、デビッド、あなたが望むなら、そうできるのよ。でも、世の中の人は皆、この教会に反対してるわ、すばらしい牧師さんたちも皆反対しているの。」デビッドは答えて言いました。「ぼくはジョセフ・スミスの言っていること好きだよ。彼は罪の赦しのため^{たまたもの}のバプテスマとか、聖霊の賜物を授けるための^{あんしゆ}接しとかについて、説教をしているもの。」

教会が組織されてわずか29日後、デビッド・ルイスは12歳の誕生日に預言者ジョセフ・スミスからバプテスマを受けました（デビッド・ルイスの回想、1908年9月10日、アンドリュー・ジョンソンの口述筆記による。末日聖徒イエス・キリスト教会記録保管所所蔵。Ensign『エンサイン』1978年9月号、p.26に引用）。

映画『レガシー』（『われらの遺産』）の中では、激しい迫害によって、組織されて間もない教会が西へ移動せざるを得なくなったのに伴い、エライザとその家族もニューヨーク州を去るようになります。やがて、エライザはイギリスからの改宗者と結婚します。

ニューヨーク州を去った聖徒たちの最初の避難地となったのは、オハイオ州のカートランドでした。カートランドに着いた聖徒たちは、そこに回復された福音を受け入れる備えのできた多くの人々がいることを知りました。

そのような備えられた人々の中に、ニューエル・K・ホイットニーとその妻エリザベス・アンがいました。この二人は宣教師が彼らの家に『モルモン書』を伝えてから、1830年に福音を受け入れました。その後、20年以上にわたり、ホイットニー家の人々は、教会の発展のために、時間、才能、家族の交わり、富を犠牲にして、ほかの聖徒たちとともに、カートランドからミズーリ州へ、さらにはイリノイ州へと移動を続けていきました。

ニューエルは教会の指導者として忙しく活動する中で、妻のエリザベス・アンと遠く離れて暮らすことが度々ありました。彼女は次のように書いています。「夫の留守中、わたしは不平不満を感じたことは一度もありませんでした……むしろ、神の王国での召しのために、夫が時間、才能、能力など持てるすべてをささげられるようにすることに喜びを感じていました。福音を受け入れたことに伴って生じた環境や人間関係などの変化で悲しく思ったことは一度もありません。」（“A Leaf from an Autobiography” *Woman's Exponent* 「自叙伝抄」『ウーマンズ・エクスポート』1878年10月1日、p.71）





ミズーリ州

預言者ジョセフ・スミスに授けられた啓示により、シオンの礎^{いしづえ}を据えるために一団の聖徒たちがミズーリ州へ派遣されることになりました。しかし、間もなく暴徒たちが彼らの前に立ちはだかりました。映画『レガシー』（『われらの遺産』）では、聖徒たちがミズーリ州へ到着して間もなく（1）、暴徒は何人かの聖徒たちにタールを塗り、鳥の羽を付けました（2）。また、印刷所を襲撃したり（3）、ハウズミルの入植地に攻撃を加えたりして（4）、最後には聖徒たちを強制的に立ち退かせてしまいました（5）。

ジェームズ・ヘンドリックと妻ドラシラは1836年にミズーリ州へ移住して来ました。1838年に、ジェームズは銃弾を受けて、思うように体を動かさない状態になってしまいました。翌年、ドラシラは夫の看護を続けながら、暴徒の攻撃を防ぎ、家族の命を守るためにできるかぎりのことをしました。

やがて食べ物が底をつく日がやって来ました。そのときのことをドラシラはこう書いています。「心の中に、相対立する二つの思いが生じ始めまし

た。」ジェームズはいつか殺されてしまうことになる、と言った実家の両親の警告を思い出して、彼女は自問しました。「両親の言うことを聞かなくて、今になって後悔していない？」しかし彼女は自らこう答えたのでした。「いいえ、後悔なんてしてないわ。わたしは正しいことをしてきたのだし、たとえ死ぬことになっても、本望だわ。罪の赦し^{ゆる}のためのバプテスマを受け、良心に恥じることは何もないのだから。」そのとき静かな細い声が彼女の耳に聞こえてきました。『「この道を歩み続けなさい。主が助けを下さるでしょう。』わたしは、それに従います、と答えました。主を信頼し続け、不平を言う気持ちになかったからです。』

ジェームズは不自由な体であることに変わりはありませんでしたが、その後も生き長らえ、信仰と希望において一つに結ばれたこの家族はやがてユタへ行き着きました（ケネス・W・ゴットフレ^ホか、*Woman's Voice : An Untold History of the Latter-day Saints* 『女性の声——末日聖徒の知られざる歴史』 p.96）。



1



2



5



4

3

イリノイ州

聖徒たちの次の集合場所はノーブーでした。ノーブーは、イリノイ州のある湿地帯を聖徒たちが開発して築いた町です。新たに教会に加わった人々は避け所を求めて(1)、また新しい神殿の建設を進めるために、この町へやって来ました(2, 3)。

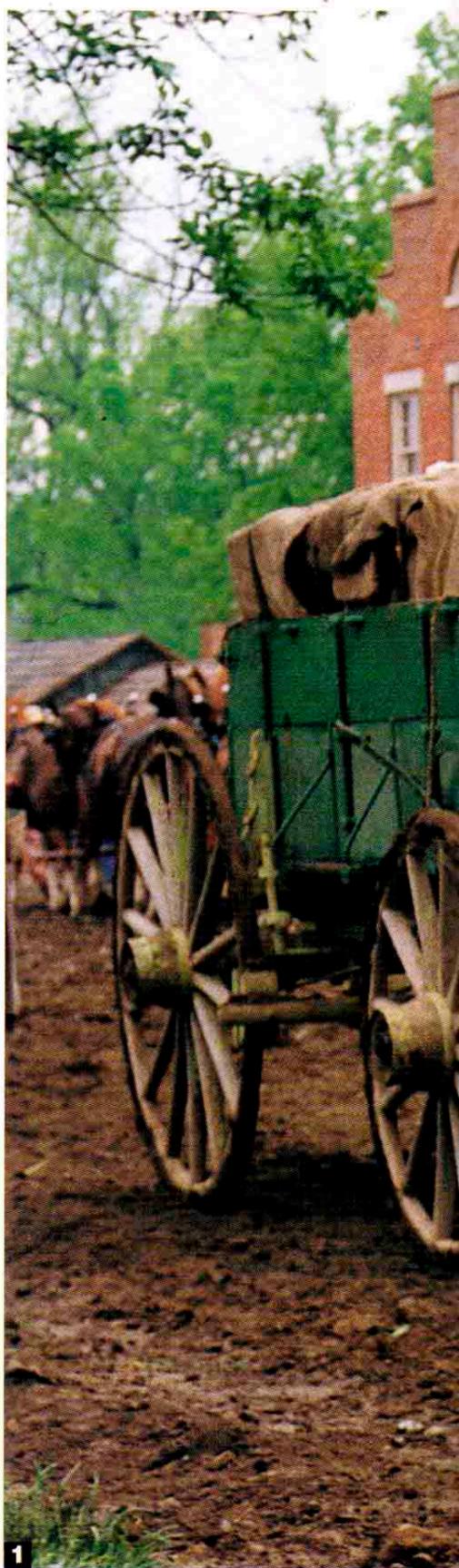
ノーブーに集合した末日聖徒のあるグループは、一人の黒人女性に率いられて来た人々でした。彼女は自由黒人(訳注——山川出版社『アメリカ史1』p.340)で、それ以前にコネチカット州で福音を受け入れ、自分の親戚しんせきにそれを伝えていました。コネチカットの聖徒たちが1843年にノーブーへ向けて出発する準備を整えたとき、ジェーン・マニングと彼女の8人の家族が一行に加わりました。残念なことに、この一行がニューヨーク州のバッファローである船に乗ろうとしたとき、マニング家の人々は乗船を拒否されてしまいました。しかし、マニング家の人々は引き返したりはせず、1,300キロも離れたノーブーまで徒歩の旅を始めました。時は10月、寒い冬の季節が迫っていました。

ジェーンの残した記録にはこうあります。「わたしたちは、靴がぼろぼろ

になるまで歩きました。わたしたちの足は、皮がむけて、ひび割れ、地面には血に染まった足跡が付くほどでした。わたしたちは立ち止まって、心一つにして主に祈りました。永遠の父なる神に自分たちの足を癒いやすしてくださるように祈るとその祈りはこたえられ、わたしたちの足は癒されたのです。」

一行はその年の遅くに、ノーブーへ到着しました。預言者ジョセフ・スミスは彼らを温かく迎え入れ、こう話しました。「もう皆さんの周りには友人しかいません。もう大丈夫です。」ジョセフ・スミスは特にジェーンに対してこう言いました。「泣いてはいけません。ここですべての涙をぬぐい去ってください。」(Biography of Jane E. Manning James「ジェーン・E・マニング・ジェームズ自伝」末日聖徒イエス・キリスト教会記録保管所所蔵, pp.2, 3-4)。

預言者の死後、聖徒たちはノーブーの住み慣れた家を後にし、ミシシッピ川を渡り(4)、アイオワ州西部まで500キロを旅し、そこで冬の間、宿営しました。





西部への旅——1847年当時のアメリカ合衆国のこの地図は、末日聖徒の西部への旅を示している。1830年に教会が設立されたニューヨーク州から旅を始めた人々もいれば、ほかの場所からこの移動に加わった人々もいる。改宗者の多くは、遠くヨーロッパからその旅を始めている。

映画『レガシー』（『われらの遺産』）は聖徒たちのこの壮大な旅の様子を描いている。

映画の中で、主人公エライザは1890年代にソルトレークに住み、孫に対して開拓者たちが残した信仰の遺産を守っていくように励ましを与える。



インディアン特別保護区

ニューホープ



ソルトレーク・シティー



メキシコ

ウィンタークォーターズ

アイオワ州

インディペンデンス

ミズーリ州

ロサンゼルス

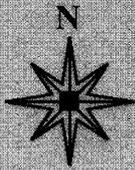
モルモン大隊

1846年、聖徒たちがアイオワの宿营地からさらに西へ移動する準備をしていたちょうどそのとき、合衆国政府から、当時行われていた合衆国とメキシコの戦争のために、500人の末日聖徒の男性に、大隊へ加わるようにとの要請が届きました。多くの聖徒がその申し出に対して、態度をかたくなにしました。政府は聖徒たちが苦境に遭ったとき、何の援助もしてくれなかったのです。しかし、ブリガム・ヤングをはじめとする指導者たちは、政府の要請を受け入れることによって忠誠心を示すことができ、またそうすること自体が西部への旅の達成の助けになるとも

考えました。実際、大隊に加わる人々に支払われる俸給はロッキー山脈への聖徒の移住に役立ちました。

それでも、「モルモン大隊」の隊員となった人々にとって、愛する者たちを困難な状況の中に置いていくのはつらいことでした。ウィリアム・ハイドは次のように書いています。「この大変な時期に、家族のもとを去ることには名状し難いものがある。彼らは故郷を遠く離れ、幌付きの荷役車以外に雨露をしのぐ場所もなく、物寂しい草原のまっただ中で、太陽の酷熱にさらされていた。そして、荒涼とした平原に寒風が吹きすさぶ冬の季節の到来も、





大西洋

西部への移動ルート

モルモン大隊の行軍ルート

モルモン大隊の除隊後のルート

0 200 400 600 800 1000

キロ

海路の旅

彼らの念頭を離れることがなかった。……大隊の隊員の多くは家族を後に残して出発した……わたしたちがいつ再会できるかは、神だけが御存じである。しかし、わたしたちは不平を口にしようとは思わない。」(ウィリアム・E・ベレット, アルマ・P・バートン共著, *Readings in LDS Church History: From Original Manuscripts* 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史文選——手稿原本より』2: 221)

当時はメキシコ領であったサンディエゴとロサンゼルスに至る3,300キロの行軍は、アメリカ陸軍史上の最長記録となりました。左ページ——映画『レガシー』(『われらの遺産』)より。モルモン大隊に加わった夫デビッドを見送る, エライザ・ウィリアムズ・ウォーカー。

多くの開拓者が陸路を取って西への旅を進めた一方で、海路を取った人々もいました。1846年、あるグループがブルックリン号という船に乗り、ニューヨーク・シティーを出発し、南アメリカを周航して、当時はメキシコ領北部の西岸を目指しました。この旅は6か月の期間を要し、2万7,000キロ以上を進む長い旅でした。このグループの一部は目的地に上陸すると、そこにとどまりニューホープという名の入植地を築きましたが、残り的人々はそこからソルトレーク・シティーへ進みました。

海路の旅は、アメリカの聖徒たちと一緒に集合するようにとの呼びかけにこたえたヨーロッパの改宗者にとっては、唯一の方法でした。ジェーン・リオ・グリフィス・ベーカーという姉妹が、イギリスから移住して来る途中の船中生活の一部について

記録を残しています。

「時々、音楽好きな人たちが幾人か集まって、一緒に歌を歌う。時には雑談に興じることもある。そして……毎日が過ぎていく。海が荒れるときには、倒れないように注意しなければならない。倒れた人を見て大笑いすることもある。」

しかし、楽しい日があれば、悲しみの日もあった。ジェーンは、幼い息子を病で失くしたときの悲しみを次のように書いている。「あの子が苦しんでいるのを見たときは、早く楽にしてください、と主に祈った。しかし、こんなに早く死ぬとは思っていなかった。主がそうしてくださった。わたしのかわいいあの子は、今霊界にいて、復活の日の朝を待っている。」(日記, 末日聖徒イエス・キリスト教会記録保管所所蔵, pp.3-4, 5. つづりと句読点のみ修正)



ロッキー山脈への旅

開拓者たちの信仰を最もよく物語っている出来事は、ノーブーから、2,000キロにおよぶアメリカ大平原を西に向けて横断した旅ではないでしょうか。ジェーン・リオ・グリフィス・



ベーカーはこう書いています。「わたしたちが進んだ道は、とても道というようなものではなかった。丘、谷、沼、泥穴、丸木橋、高さ30センチもの木の株が立ち並ぶ……湿地などが、これでもかこれでもかというように続き、よほど注意をしないと、幌付きの荷役車が日に10回も横倒しになるのだ。イギリスの古い道路がとてものなつかしく思える。毎日、明日こそはもっとましな道を進めたら、と思う。しかし状況はますますひどくなるばかり。」(日記、末日聖徒イエス・キリスト教会記録保管所所蔵、p.22)

アイオワ州(左ページ右下)からウインタークォーターズ(左ページ左下)へ、さらにアメリカの大平原(上)を横断して続く、そのほとんどがモルモンの開拓者によって切り開かれたものでした。

開拓者たちは苦難を一つ一つ克服していきました。彼らが耐えたからこそ、教会は持ちこたえたのです。開拓者たちは、グレート・ソルトレーク盆地から、さらにアメリカ西部のほかの地域にも入植を進め、宣教師たちは、太平洋、イギリス、ヨーロッパ、中南米、中東、アジア、アフリカなど実に様々な地域に基礎を築きました。

現在、これらの最初の開拓者たちがわたしたちに残してくれた遺産は、世代から世代へ、開拓者から開拓者へと受け継がれています。それは、あたかもジョセフ・スミスが語った言葉どおりと言えるのではないのでしょうか。

「いかなる汚れた者の手も、この業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国々に広まり、あらゆる者の耳に達し、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして、大いなるエホバは、業は成ったと告げられることだろう。」(History of the Church『教会歴史』4:540) □

福音は秘密にしてお

良きおとずれを分



マリサ・ホイタカー・ハンフリー

ほとんどの人はアンモンとその兄弟たちのように一生涯を専任宣教師として過ごすわけではありません。また、王に福音について教えることもないでしょう。(アルマ17-23章参照)。

しかし、人々と福音を分かち合うのには、それほど長い年月と努力が必要とされるわけではありません。イエス・キリストの福音という最も偉大な宝をあなたの友人や家族に与えることによって、彼らを王家の人々のように扱う方法を紹介します。

単純に行動する

■聖文を読み、教会やセミナーでできるだけたくさん勉強してください。人々に福音を紹介する前にあなた自身が福音の基本原則を知っていなければなりません。

■福音に従って生活することによって得た祝福を簡条書きにしてください。このリストを活用することで、伝道活動に力を注ごうという決意を新たにしてください。

■教会員でない友人を教会の活動に招待し、健全で楽しい雰囲気のみみ出す影響力に触れてもらいましょう。

■福音に情熱を燃やしてください。福音に対する情熱があなたのあらゆる行いに表れるようにしてください。そうすれば、友人もその情熱を感じてくれるでしょう。

心からの関心を示す

■真の友となってください。友人の行動に関心を示す時間を取ってください。そうすれば、彼らが教会について勉強してみたいと思っているかが分かります。

■友人が教会について質問してきたら、セミナーや教会に招待してもよいですし、一緒に聖文を読んでもよいでしょう。

■友人に奉仕してください。奉仕という模範を通して福音を紹介するのはすばらしい方法です。しかし、相手が教会に関心を持っているかどうかにかかわらず、奉仕は愛に基づいて行うべきであることを忘れないでください。

■いつも積極的な姿勢を示すことにより、人々の心を高めましょう。あなたがささいなことで落胆したりせず常に前向きであることが分かると、友人はやがて関心を



くものではありません

かち合いましょう

持ち始めます。あなたがなぜいつも幸福そうなのか、尋ねてくるかもしれません。答えは簡単です。

最善を尽くす

■良い模範を示してください。あなたは「いつでも、どのようなことについても、どのような所にいても」イエス・キリストが望んでいらっしゃるような生活を送ることによって、宣教師になることができます（モーサヤ18：9）。友人にとって初めて目にする福音の模範はあなたであることを忘れないでください。

■友人に『モルモン書』を贈ることによって福音を紹介するきっかけを作ってください。表紙の内側にあなたの証^{あかし}を書き、モロナイ書第10章3節から5節に印を付けて、特別な人に贈りましょう。

■あなたの家庭で行われる活動に友人を招くとよいでしょう。家庭の夕べに招待してください。

■だれかのために善い行いをしましょう。利己的でなく、心からの行いは人の心を打つものです。

勇気を持つ

■友人を愛し、親しくなってください。友情を失うようなことにはなりません。むしろ、あなたが大切にしているものを分かち合おうとしたあなたを尊敬してくれるでしょう。

■伝道関連のファイヤサイドを計画してください。友人や家族に、教会員でない友人を連れて来てもらいます。そして、専任宣教師にこの会に出席してくれるようお願いするのです。ファイヤサイドの後で、来てくれた人々に『モルモン書』を贈り、宣教師と会う約束を作ります。

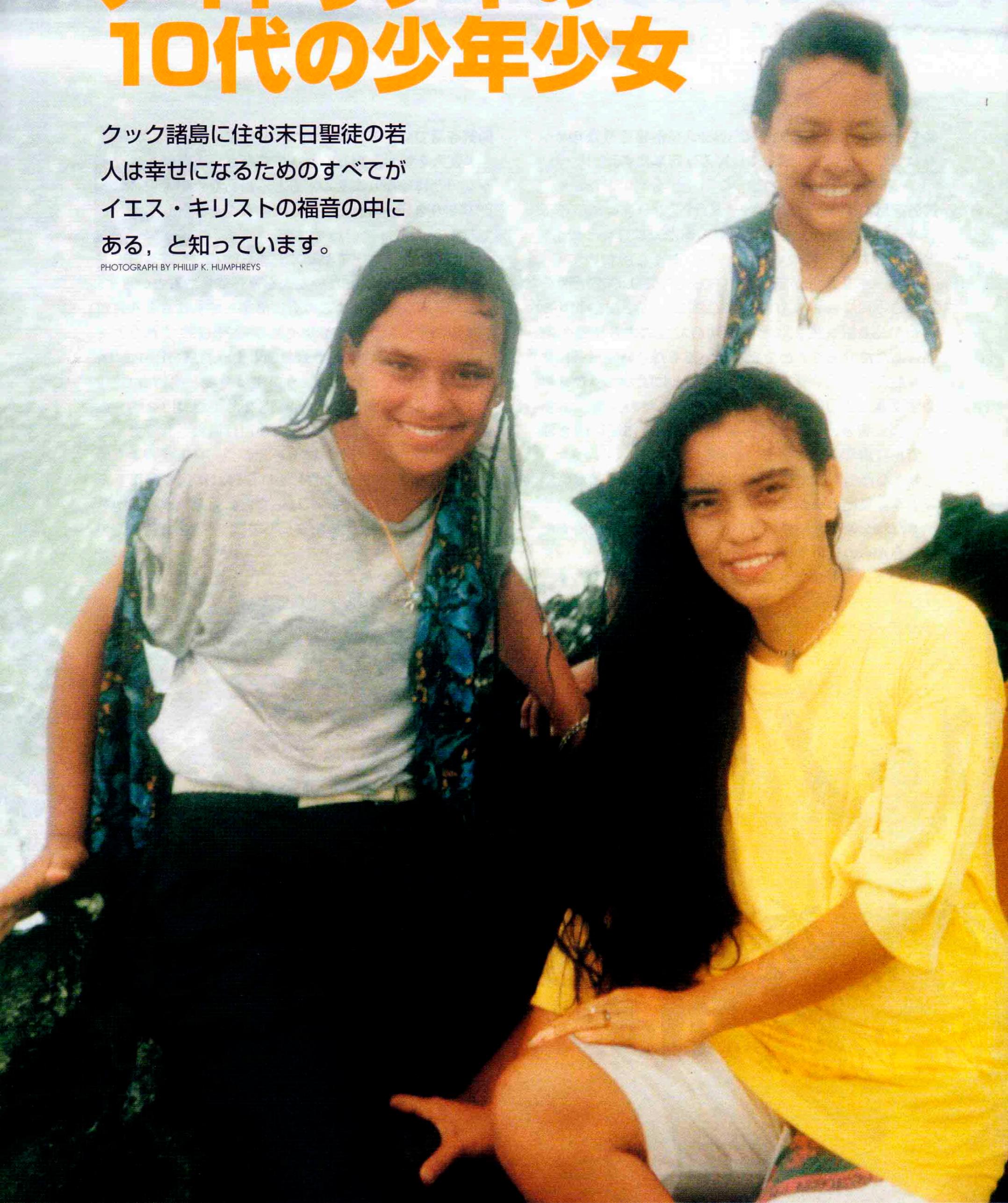
■人々に話しかけましょう。主は教義と聖約第33章8節でこうおっしゃいました。「あなたがたの口を開きなさい。そうすれば、あなたがたの口は満たされるであろう。そして、あなたがたは……昔のニーファイのようになるであろう。」人々に話しかけなければ何も起こりません。話しかければ、天父はあなたに何を言うべきかを知らせてくださいます。□



アイトゥタキの 10代の少年少女

クック諸島に住む末日聖徒の若
人は幸せになるためのすべてが
イエス・キリストの福音の中に
ある、と知っています。

PHOTOGRAPH BY PHILLIP K. HUMPHREYS



土 曜日の午後になると、多くの若人は雑用や学校の宿題を忘れて、何か楽しいことを求めて動き始めます。けれどもこの小さな島で楽しいことが見つかるのでしょうか。楽しさにも限界があるのではないのでしょうか。

しかし、南太平洋、クック諸島のアイトゥタキに住む若人はたとえ島が小さくても、自分たちの生活がそれによって狭められているとは思っていません。彼らは夢中になれるものや幸せを見いだしています。とは言うものの、この島には営利を目的とする企業が1社もありません。

読者の皆さんはまさかと思うかもしれませんが、でも、ほんとうに一つもないのです。ショッピングセンターもなければ、映画館もありません。自動車もほんのわずかしみかけません。

だからといって、別に不便を感じているわけではありません。青少年たちは、自分たちの社交活動のほとんどを教会の中で、また友達同士で行っています。その多くは、スポーツあるいは文化的な活動です。

「絶海の孤島で生活する最大の利点は、麻薬や暴力、それに非行がまったくないことです」とコレシュ・ミティアウ（17歳）は言います。

でも同年代の若人からのプレッシャーはあるでしょう？

「それって何ですか？」20人の若い男女が一斉に聞き返しました。しかし、同年代の若人から多少のプレッシャーは確かに受けているようです。島の中で教会員の若人は少ししかいませんが、全員が教会に活発でいられるように助け合っています。島全体の人口2,500人に対して、彼らの小さな支部の会員数は約90人です。

セミナーに登録している若人は20人近くしかいませんが、セミナープログラムは成功を収めています。ほとんど全員が100パーセントの出席率です。毎朝早く起きてセミナーに出席するのは容易ではありませんが、若人はそれぞれ自分が行かなければみんなが心配することをよく自覚しているのです。

若人はセミナーに出席することによって霊的に強くなっているだけ

でなく、学業成績も向上しています。「わたしはセミナーに通っているうちに学校の勉強も頑張りたいという意欲がわいてきました。そして成績を上げようと決意しました。」1994年にジャミー・ラジェックとともに学年でトップの成績を収めたエリザベス・パライはそう話しています。

エリザベスと同じようにテリー・グラシーも福音の持つ影響力は霊的面だけではないことに気づきました。テリーはクック島から優等賞を受けて、工学を勉強するためにニュージーランドへ行きました。「わたしは教会を通して自分の進路を見つけることができました」とテリーは語っています。

しかし、末日聖徒のすべての若人が苦勞している問題が一つあります。それは、コレシュが言うように、「この島の問題は教会の資料がなかなか手に入らないことです。」

クック諸島では伝統が大切にされています。最初の移住者は紀元800年に到着したポリネシア人でした。クック諸島はその後、1888年にイギリスの保護領として宣言され、1891年にはニュージーランドの管轄下に置かれました。そして1965年に独立しましたが、島民は依然としてニュージーランドの市民権を持っています。

教会の最初の宣教師がクック諸島に到着したのは1950年のことでした。そして間もなく支部が設立され、現在に至っています。伝道活動の進展は決して速くありません。けれども、会員たちは隣人に良い模範を示しています。とりわけ彼らはその勤勉さで知れわたっています。

食料はすべて自給自足です。家族全員で協力して働きます。パンノキ、たるいも、クムラ（さつまいもの一種）、パパイヤ、マンゴ、ココナツ、それに様々な種類の野菜を食物としています。

いちばん好きな食べ物を尋ねられたアンジェリン・ミティアウは「スナック菓子です」と答えました。その答えに全員が笑みを浮かべました。島ではスナック菓子をほとんど見ることがないからです。何か月もスナック菓子が手に入らないこともあります。

アイトゥタキ島ではほかの地域の若い男女のように様々な娯楽を楽しむことはできませんが、教会の若人はまったく気にしていません。彼らには福音があり、土曜日の午後ともなれば、楽しみを自分たちで見つけ出しているからです。□



「喜ばしい出会い」フアン・アルド・レオーネ

15年前、わたしはアルマとモーサヤの息子たちのような「喜ばしい出会い」(アルマ27:16)を経験しました。総大会に出席し、亡くなった親族のために神殿の儀式を執行するという目的で、アルゼンチンの我が家からソルトレーク・シティーまで旅行した時のことです。驚いたことに、ソルトレーク神殿の廊下で、40年前にわたしにバプテスマを施してくれた宣教師エバンズ・ジョーンズ兄弟にばったりと出会ったのです。久しぶりの再会ではありましたが、お互いの顔を覚えていて、喜びでいっぱいになりました。

ジョーンズ兄弟と最後に会ったのは1942年のことでした。そのときわたしはまだ12歳で、アルゼンチンのコルドバに住んでいました。その年の2月5日、何人かの人たちが、バプテスマを受けるわたしのために近くの用水路に集まってくれました。水の中に入り、素足に水底の泥を感じたあの感触を今でもよく覚えています。そっと水の中を歩くときに、とても大切なことをしている、という実感がありました。わたしは胸を高鳴らせながら主と神聖な約束を交わしたのです。

それ以来、わたしは恵まれてアルゼンチンにおける主の業の発展を見ることができました。大勢の人々がバプテスマの水をくぐりました。初期の時代には、集会に人が10人来たぐらいで、出席が多いと見なしていましたが、

現在、アルゼンチンには伝道部が10、ステークが46あります。また、祝福されてプエノスアイレスには神殿が建っています。

バプテスマを受けて52年後、わたしはアルゼンチン・コルドバ伝道部の副部長として、もう一度あの用水路を訪れました。古い用水路の水が今でも昔と同様の流れを保ち、その一带に育つ草木に命を与えている姿を観察することができました。それと同様に、バプテスマもわたしとわたしの家族、そしてわたしの子孫に命を与えてくれたのです。ジョーンズ長老、ほんとうにありがとうございます。回復された福音という高価な宝を人々と分かち合ってくださいる皆さん、心から感謝しています。□



PHOTOGRAPHS COURTESY OF THE AUTHOR



『最初の示現』デル・パーソン

1820年春、父なる神とイエス・キリストが聖なる森で少年ジョセフ・スミスに御姿を現された。ジョセフはこう言っている。
「その光がわたしの上にとどまったとき、わたしは筆紙に尽くし難い輝きと栄光を持つ二人の御方がわたしの上の空中に立っておられるのを見た。
すると、そのうちの御一方がわたしに語りかけ、わたしの名を呼び、別の御方を指して、
『これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい』と言われた。」(ジョセフ・スミス—歴史1：17)



聖

徒たちがノーブーから追放されたとき、ルイーザ・バーンズ・プラットはロッキー山脈に独りで移動しなければならなくなった。夫が南太平洋に宣教師として派遣されたのだ。ルイーザが「夫を地の果てに派遣した人々は、なぜわたしにもそのような冒険的な旅に出る備えができているか尋ねてくれないのだろう」と、不思議に思った。やがて彼女は、彼らの真意を告げられた。彼らは、ルイーザならその有能さゆえに独りで旅し、しかもほかの人々を援助できるであろうと考えていたのである。「その言葉がわたしの中に、自立の精神を呼び覚ましてくれた。」彼女はそう記している。ルイーザは直ちに牛と幌付きの荷役車を用意し、「比較的元気に」町を出た。このような態度は、モルモンの開拓者たちの勇気と信仰の表れであり、過去も現在も受け継がれている（本誌「信仰の遺産」p.32参照）。



ヒンクレー大管長、 精力的に 多忙な日程をこなす

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の近況を報告すると、大管長は可能なかぎり多くの人々に自らの証を述べ、会員ならびに福音に対する愛を伝えるために、相変わらず多忙な毎日を過ごしている。

アメリカ在郷軍人会への出席

ヒンクレー大管長は、ソルトレーク・シティーで開催されたアメリカ在郷軍人会の全国会議の一環として行われたアメリカ愛国者宗教礼拝において基調演説を行った。

ヒンクレー大管長は合衆国の貨幣と紙幣にそれぞれ刻印され、印刷されているアメリカ合衆国のモットーである「神により頼む」を引用して次のように述べている。

「我が国はこのモットーを基として興されたとわたしは考えています」と、テンプルスクウェアのタバナクルに集まった6,000人の聴衆に向かって大管長は語り始めた。「わたしたちは全能者の力によって導かれ、守られるという揺るぎない確信を抱いてきました。……

もしわたしたちが神の存在を認めないとしたら、この宇宙を支配する御方である全能者が存在することを認めないとしたら、個人と国家の責任の基本となるきわめて重要な要素は何の意味もなさなくなり、やがて責任のない世の中と化してしまうことでしょう。わたしたちは神が存在するという認識に立って、今日の膨大な社会問題に立ち向かっていることに、わたしは満足を覚えています。」

宗教行事が行われた翌日、アメリカ在郷軍人会は、ヒンクレー大管長が半生を通じて果たしてきた貢献をたたえて「善行賞」を授与している。この賞は、全米の候補者の中から同組織の指

名委員会により選ばれた人に贈られるもので、過去の受賞者には合衆国大統領ほか著名な人々が名を連ねている。

「ヒンクレー大管長は、数多くの説教を通して青少年と成人に感動を与え、励ましを与えてきました。彼の卓越したメッセージは、人々の精神的な力と霊性を高めるとともに、わたしたちの心と記憶の中にとどめられてきました」とアメリカ在郷軍人会のスポークスマン、ジェームズ・マッキーは語っている。

オレゴン州における地区大会

ヒンクレー大管長は多忙な日程を割いて、オレゴン州ユージーンへ赴き、地区大会に集まった約4,600人に語り、神権者訓練集会において指導し、地区内で働く192人の専任宣教師を激励した。

ヒンクレー大管長は大会中、説教の時間の多くを若人に向けて費やしている。「わたしたちは手と思いを訓練するようにと命じられています」と大管長は述べた。「皆さん一人一人が力のかぎり御業の発展のために貢献していることを感謝しています。皆さんの正しい行いに感謝しています。皆さんの勇気に感謝しています。互いに助け合うために努力していること、具体的にはインスティテュートに出席し、セミナーに出席することによって福音の教えがもたらす祝福を得るだけでなく、友人との交わりにおいても祝福を得ていることに感謝しています。皆さんに申し上げたいことがあります。教会員の中から友人を見つけてください。団結し、お互いを強めてください。そうすれば、誘惑に遭ったときに、皆さんには祝福を求めことができる人がおり、必要なときに力を与えてくれる

人がいます。この教会はそのような目的のためにあるのです。それは、たとえ誘惑に負けそうになったとしても、わたしたちが正しく良い思いを持って自分の足で堂々とまっすぐに立つことができるように助け合うことです。」

4時間にわたって開かれた神権者訓練集会において、ヒンクレー大管長は出席した615人の指導者に対して、会員たちの霊性を築くことに努力を集中するようにと勧告した。さらに、『聖書』と『モルモン書』を読むと同時に、預言者ジョセフ・スミスに関する書物を読むように勧告した。

「祈り、人々に奉仕すること、そして皆さんのワードの会員たち、特に若人に対して手を差し伸べ、彼らの心をつかむために努力してくださるよう強くお願いします。一人一人の若人と話す時間を取ってください」と大管長は述べた。

ブリガム・ヤング大学での 礼拝集会

ブリガム・ヤング大学マリオットセンターを埋めた学生と教職員を前にしたヒンクレー大管長は、平凡な存在に甘んじることをなげき、学生たちに勧告した。「皆さんは確かに善良な人々です。」大管長は礼拝集会に出席した2万2,000人を超える人々に語った。「けれども善良であるというだけでは不十分です。いずれかの分野で人々のためになる存在でなければなりません。世の中に貢献しなければなりません。皆さんがいることによって世界はより良い所となり、皆さんの持つ善がほかの人々の間に広まっていかなければなりません。……

様々な問題が満ちあふれ、絶えず闇と邪悪の挑戦にさらされている現在の世の中であって、皆さんは平凡な存在ではなくそれ以上の人になることができます。またそうならなければなりません。」大管長はさらに続けて、次のように語った。「皆さんは社会の中に入り込み、正しいことを臆することなくはっきりと言うことができます。

じっと座って、……世界が無目的にさまよっているのを傍観してはなりません。世界は、世界を救うことの

できる価値あるものについて臆することなく話す皆さんの力と勇氣、声を必要としているのです。」

ヒンクレー大管長は、出席者一人一人に対して次のように訴えている。「わたしたちの文明を光り輝くものに変え、わたしたちの生活に慰めと平安を与える教えを人々に語るることによって社会の指導者になってください。皆さんは指導者になることができます。この教会の会員である皆さんは、教会が主張する教えに関して指導者でなければなりません。……あらゆる真理の敵は皆さんの努力しようとする気持ちに迷いを生じさせることでしょう。しかし、そのような恐れを捨て去って、真理と義と信仰の大義を推し進める勇氣を持ってください。生活をこのように変えることを今決意してください。そうすれば、今後このことで思い悩む必要はなくなるのです。」

ハロルド・B・リー記念図書館の 鉄入れ式

ヒンクレー大管長は第一副管長のトーマス・S・モンソン長老、第二副管長のジェームズ・E・ファウスト長老とともにヘルメットをかぶり、ブリガム・ヤング大学構内のハロルド・B・リー記念図書館拡張工場の鉄入れ式に参加した。

ヒンクレー大管長が語った拡張計画によると、約2万2,000平方メートルに

及ぶ拡張部分には大学が所有する貴重な資料、保存が困難な資料を保管する書庫、広範な資料を集めた家族歴史図書館、家政学、家庭科学、社会科学に関する資料の書庫、200の座席を有する講堂、400台のターミナルを持つコンピューター室を2室、最新のエレクトロニクス技術を採り入れた4室の教室が設けられる。建物の大きさは10のステーキセンターに匹敵し、建築費用は10のステーキセンターの建築費用を上回るが、個人の寄付金により賄われることをヒンクレー大管長は付け加えた。

モンソン副管長は話の中で建物の名称に触れて、「ハロルド・B・リー大管長に対してささげる称賛にふさわしい」施設であると述べた。

「これは偉大な業績を残した人にふさわしい施設になることでしょう」とモンソン副管長は続けている。「ハロルド・B・リー大管長は、神の真理に関して生きた教科書でした。彼は常に教え、常に解き明かし、自らが教えることを常に実行していました。主をよく知った人でした。いかなるときも主の前に正しい人でした。」

ファウスト副管長は、図書館は「この特別で、すばらしい、独特な『主の』大学の宝の一つに数えられるようになるでしょう」と述べた。

独身成人ファイヤサイド

ヒンクレー大管長はソルトレーク・



PHOTO BY MARK PHILBRICK

ブリガム・ヤング大学構内にある図書館の拡張工場の鉄入れ式に訪れたヒンクレー大管長と握手する同大学の学生たち

タバナクルで開かれた独身成人特別ファイヤサイドで、結婚、神聖なものを持つ価値、奉仕について語った。

結婚を待ち望んでいる人々に向かって、大管長は次のように述べている。「希望を持ち続けてください。努力をやめないでください。やめてよいのは結婚について悩むことだけです。結婚について思い煩うのを忘れ、ほかの活動に熱心に携わっているならば、輝ける未来が切り開かれることでしょう。」

ヒンクレー大管長はまた、出席者に対して次のように約束している。「皆さん一人一人の中には神聖なものが宿っています。皆さんは神の息子、娘であって、すばらしい受け継ぎを持っています。したがって、自分を軽視したり、見下げたりすることのないようにしてください。皆さんの中には、自分には魅力がない、何の才能もないと考えている人がいるかもしれません。自分を哀れむという泥沼から抜け出してください。」

教会の指導者はまた教会員に対して「自分よりも深刻な問題を抱えている」人々に手を差し伸べるようにとの勧告を与えた。大管長は、独身者にとっても既婚者にとっても人生はチャレンジに満ち、容易ではないことを指摘した後、「既婚者と独身者を何かにつけて分け隔てるべきではありません。皆、教会員であって、同じように関心と注意を向けられるべきであり、同じように奉仕の機会を与えられるべきです。」

ボーイスカウトジャンボリー

ヒンクレー大管長はユタ州フィルモアで開催された「ユタ・ヘリテッジ・ジャンボリー（野外キャンプ）」に出席し、集まった約2万8,000人のボーイスカウトに対して彼らが「スカウトの誓い」を全力を尽くして守るならば、幸福を見いだすことができると約束した。

「どのような環境に置かれても常に全力を尽くす習慣を身に付けると、それによって皆さんの人生は幸福になります」と語った。

新たに建設される神殿の発表

大管長会はアメリカ合衆国モンタナ



PHOTO BY JED CLARK

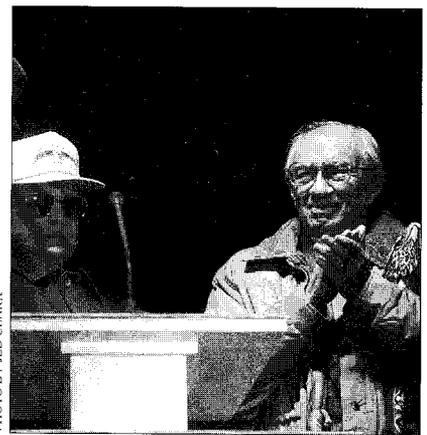


PHOTO BY JED CLARK

ボーイスカウトジャンボリーに参加するヒンクレー大管長

ボーイスカウトジャンボリー期間中、出し物に参加する若人たち



オープンハウスの期間、68万人近い人々がユタ州マウント・ティンパノゴス神殿を訪問した。

州のビリングスに教会で63番目の神殿を建設することを発表した。この神殿はモンタナ州、サウスダコタ州、ワイオミング州北部の21のステークに所属する約5万8,000人の教会員が利用することになる。建設用地はすでに取得しており、設計図が完成し、政府の認可が下り次第、着工することになる。

この新しい神殿の発表は、67万9,217人の訪問者を集め、1か月にわたって行われたユタ州マウント・ティンパノゴス神殿のオープンハウスの期間中に行われた。

現在、神殿の建設工事が行われているのは、合衆国のミズーリ州セントルイス、ユタ州バーナル、イギリスのプレストン、コロンビアのボゴタ、エクアドルのグアヤキル、ドミニカ共和国のサントドミンゴ、スペインのマドリッド、ボリビアのコチャバンバ、ブラジルのレシフェの各地である。すでに神殿の建設が発表されている地域は、メキシコのモンテレイ、合衆国のマサチューセッツ州ボストン、ニューヨーク州ホワイトプレーンズ、テネシー州ナッシュビルである。□

海の島々が奉獻され、キリバスに最初のステークが組織される

十二使徒定員会のL・トム・ペリー長老は8月、キリバスに最初のステークを組織した。ペリー長老は前日、太平洋諸島のキリバス、ナウル、ツバル、トケラウ、ウォリス、フツナ、バヌアツを福音を宣べ伝える地として奉獻した。

タラワ・キリバスステークはタラワに本拠地を置く。タラワは日付変更線と赤道が交差する地点にあり、幾つかの小島が集まって構成されている。同地はキリバス諸島共和国を構成する3つのマイクロネシア珊瑚礁群の一つで、太平洋中央部に520万平方キロにわたって広がる環礁の中にある。

タラワに福音が最初に紹介されたのは約25年前で、現在は共和国の人口7万人のうち、約4,600人が教会員となっている。新しいステークを構成するのは、キリバス共和国の全人口の3分の2の人々が生活するタラワに住む

2,400人の教会員である。

ペリー長老は福音を宣べ伝える地として6か所の諸島を奉獻した。「あなたがこの地上で子らのために定められた福音の真理は単純明快であるにもかかわらず、様々な解釈を主張して争う世の中から、あなたはこれらの島々を隔離してこられました」とペリー長老は奉獻の祈りで述べている。「愛する父よ、永遠の福音の偉大な真理がこれらの島々で確立されていることを心から感謝します。」

ペリー長老はキリバスでの任務を終えて帰国してから、このように述べている。「島々の末日聖徒の間には一致の精神がみなぎっていました。わたしは霊

の高まりを抑え切れませんでした。島を訪れて人々に会ったら、きっと皆さんも涙があふれてくるのを抑えられないでしょう。わたしは彼らを好きになりました。現在の教会の中にこのような人々がいるとは考えてもみませんでした。

主は海の島々にいる人々に対してきっと大きな愛を抱いておられることでしょう。主は聖典の中でそのことを繰り返し述べておられるからです。これらの島々における教会の成長を見るときに、主の約束が現在成就されつつあることを感じます。」□



ステーク設立のためキリバスを訪れたL・トム・ペリー長老を歓迎するモロナイ高校の生徒たち

ハンガリーを訪れた ホランド長老

十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は先ごろハンガリーを訪れ、同国の約1,000人の教会員の歓迎を受けた。

ホランド長老は自由の戦士として近代ハンガリー国家を築いた人々を称賛

した後に、ハンガリーの教会員と宣教師も同様に、自由を得るために力を尽くしていると述べている。神殿の結び固めの儀式の大切さにも触れている。ホランド長老は一人の若い母親と子供を壇上に招いて、子供を腕に抱きながら、結び固めのきずなは強い力で結ばれており、「わたしたちが交わす聖約に忠実であるならば、いかなる力もこれを断ち切ることはできません。天父はすべての家族が聖なる神殿で永遠に結び固められるように一つの計画を用意しておられます」と説明した。

ホランド長老は会員たち一人ひとりと福音を分かち合う

ように奨励している。「人々がこれらの真理を知るには、皆さんを通してしかほかに方法がありません。ハンガリーの人々は、安全が得られることを知り、福音によって明らかにされているように、皆さんの手から子供たちが取り上げられるようなことは決してないことを知る権利があります。」

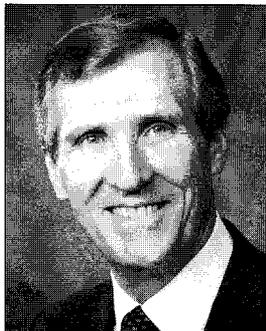
ハンガリーのブダペストでの集会を終えた後、ホランド長老は七十人定員会のデニス・B・ノイエンシュバンダー長老と妻のレアン・クレメント・ノイエンシュバンダー姉妹とともにハンガリーのタサルを訪れ、同地に住む約20人の教会員の歓迎を受けた。ここで開かれた集会には、クロアチアの国境地域およびボスニアヘルスゴビナのセルビア人支配地区に駐留している男女の兵士たちが駆けつけている。

ホランド長老はこの後、ボスニアのルツラを訪れて、同地の基地に駐留している約70人のアメリカ軍関係者と会っている。□



ボスニア駐留軍人を訪れたジェフリー・R・ホランド長老

アジア北地域会長会へのインタビュー 日本，韓国，ロシア極東部 での 教会の発展



第一副会長

レックス・D・ピネガー長老



会長

デビッド・E・ソレン長老



第二副会長

L・エドワード・ブラウン長老

アジア北地域では、日本と韓国が教会の中心となって成長を遂げてきたが、近年、ロシア極東部（シベリア東部）が成長の兆しを見せ始めている。アジア北地域における教会の現状を報告するために、教会機関誌編集部は地域会長で七十人定員会のデビッド・E・ソレン長老と、同じく七十人で副会長のレックス・D・ピネガー長老、L・エドワード・ブラウン長老にインタビューした。

ロシア極東部での 人道的救援活動

—ロシア極東部ではどのような発展を遂げていますか。

「教会のアジア北地域には広大なロシア、シベリア地方の東半分が含まれています。ここにはおよそ800万の人口が住んでいます。1994年の晩秋にロシア太平洋沿岸地域は大洪水に見舞われましたが、教会では食料、衣類、毛布、医薬品など5,000世帯相当分の救援物資を送ることができました。

わたしたちはいつも、こうした人道的救援活動を実施するに当たって、援助を受けた人々から何の見返りも期待しません。しかしうれしいことに、教会は洪水による被災者を支援するため

に政府機関と接触を図った結果として、ウラジオストックの大学で英語、経営学、法律、会計学を教えるために人道的救援活動に携わる夫婦の宣教師を4組派遣してほしいという要請を受けました。現在、ウラジオストックとマガダンに教会の小さな支部があります。わたしたちはこの新しい前線から福音がさらに広められることを期待しています。」

日韓両国での成長

—日本と韓国はどのような成長を遂げているのでしょうか。

「ある基準からすると両国の成長は遅いように見えるかもしれませんが、わたしたちは教会員の成長に大変満足しています。日本のキリスト教徒は全人口の2パーセントにしかすぎません。しかし、末日聖徒イエス・キリスト教会は、日本で3番目に大きいキリスト教教派に位置づけられています。日本には25のステークに10万人以上の会員がいます。一方、韓国の全人口に占めるキリスト教徒の割合は日本よりもはるかに高く、16のステークに6万人以上の会員がいます。教会員は社会的、文化的にかなりのプレッシャーを受けていますが、両国における定着率と活

発率は改善されつつあります。

末日聖徒であるために 要求される勇気と献身

日本と韓国において末日聖徒であるためには大きな勇気と献身が必要とされます。すでにご承知のように両国では、労働者は時間と労力をすべて仕事にささげるといふ労働倫理があります。さらに多くの雇用者は従業員が会社に対してある程度の忠誠心と帰属意識を持ち、家族や宗教よりも仕事を優先させるであろうという期待感を持って従業員を見ています。日本にはこのようなことわざがあります。「出るくいは打たれる。」日本は全島合わせてパラグアイよりも狭い国土に1億2,500万もの人々が住んでいます。したがって日本では、どうしたら他人とうまくつきあっているか、を学ばなければならないのです。日本人は地域社会や会社に対して強い一体感を持っているため、教会員は時として地域社会を乱す「出るくい」と見なされることがあります。わたしたちは、教会員がむしろ全体の強度を高めるくいであることを日本人の皆さんに理解していただくように努力しています。」

日韓両国での広報活動

—末日聖徒のイメージを改善するために日韓両国ではどのような努力が払われていますか。

「地域広報ディレクターは、日本と韓国の全ステークで広報評議会を組織して、会員たちが大衆に向けて教会のイメージを高めるような働きができるように支援しています。会員たちは末日聖徒の生活や信条を紹介するために、メディア手段を活用しています。例えば、1995年1月の阪神大震災以降、教会の支援活動が与えた効果や素早い対応について好意的な記事が新聞や雑誌に何度か掲載されました。昨年、日本で教会と教会員に関して報道された記事は150以上に上っています。韓国でも同様の広報活動が行われています。

関心が高まる家族歴史活動

また、家族歴史活動に対する会員た

ちの関心が大きく高まっています。アジアのほとんどの国には、先祖を尊敬し、あがめる文化があるため、この活動は人々の心をとらえるきっかけになると思います。教会員は家族歴史センターの設置にも積極的であり、またそれを活用するだけでなく、ほかの宗教の人々にも利用を呼びかけています。多くの教会員は時間と労力に余裕があるわけではありませんが、非常に精力的に家族歴史活動を実施しています。こうした努力は、会員たちの生活に祝福をもたらし、また教会の発展に大きく寄与することになるであろうと考えています。

家族歴史活動とともに、韓国・ソウル神殿と東京神殿は引き続き会員たちの霊的なよりどころとなっています。多くのステークでは新しい改宗者に対して死者のためのバプテスマを執行することを奨励しています。この儀式に参加することによって彼らは、自身のエンダウメントを受け、家族と結び固めを受けるために早い機会に再び神殿を訪れたいという気持ちを抱くようになっていきます。』

第2世代の教会員の活躍

—会員たちはほかにどのような点で力をつけていますか。

「日本と韓国における開拓者として、第1世代の教会員が、犠牲と努力を積み重ねてきた実りが数多く見られるようになっていきます。すでに第2世代の会員たちは力をつけてきており、宣教師や指導者のかなりの部分を占めるようになっていきます。日韓両国の専任宣教師の4分の1以上、日本の宣教師訓練センターに入る青年男女の3分の2以上は第2世代の教会員です。

韓国では、大学を休学して伝道に出る学生たちは伝道を終えて復学することが非常に困難な場合が多いのですが、彼らはこの犠牲を払う決意をして伝道に出ています。さらに韓国のすべての青年男子には3年間の兵役義務があります。信仰と不屈の証をもって堪え忍んできた第1世代の改宗者は、世界中の末日聖徒と同様に強さを持っています。

若人が直面するチャレンジ—— 結婚を優先させることで 得られる祝福

若くして教会に加わる人々も大きな力となっています。生活費の高騰、教育と就職にまつわる様々な障害が理由で、アジアの国々の多くの若者は、結婚する時期を次第に遅らせています。教会指導者は、この社会的傾向によって教会内にも独身者が増えていることに警鐘を鳴らす一方で、結婚を優先順位の第1位とするよう教え、励ましています。結婚して家族を築くことを優先させる末日聖徒は、祝福を受けています。彼らは天父の計画に従って生活するための努力をしたからです。

最近教会に加わったある大学生の体験から、日本と韓国の多くの若い改宗者がどのように勇気を発揮しているかを説明しましょう。この学生は、いわゆる過激派グループに入っていました。アジアをはじめとする各地域では英語クラスを伝道活動の一環として行っていますが、彼らは宣教師の誘いを受けて、おもしろ半分に出席することにしました。この青年は続けて出席することを決意し、自分の意志で、2回目の英語クラスに出席しました。彼は末日聖徒の聖典から間違いを見つけ出そうとして研究を始めました。しかし、彼は間違いを見いだせず、やがて教会の教えに改宗しました。両親は息子がこの新しい宗教に入ったためにもっと反抗的になるのではないかと心配しました。また友人たちは、彼を翻意させるためにバプテスマの行われた同じ晩に過激派の集会を開きました。けれども彼は、正しいと知ったことを貫きました。さらに、両親と二人の友人が彼の生活の変化に強い印象を受け、最近、宣教師から福音を学び始めました。

日本での伝道100周年を 記念するための準備

日本の会員たちは彼らの歴史上の大切な節目を祝う準備をしています。日本伝道部は1901年、ヒーバー・J・グラントによって開設されました。2001年に日本における教会の100周年記念行事を行うために準備委員会が組織さ

れています。委員会では歴史的な出来事と証を1冊の本にまとめて出版する作業を進めています。この本は会員たちが愛読し、また会員たちを啓蒙することだけを目的とするのではなく、図書館に寄贈して広く一般の人々に教会の歴史を知らせることを目指しています。

教会員の数々の人道的行為

会員たちの力を説明するのに彼らが行ってきた数々の人道的な行為を挙げないわけにはいきません。そうした働きによって多くの人々に活力と希望を与えてきました。日韓両国とも、会員たちが納める^{しゅうふん}の一分の一と断食献金によって財政的に自立しています。両国の献金は、世界のほかの地域において教会の成長と支援のために使われています。阪神大震災の際の教会員の対応から、彼らは援助を必要とされれば、いつでも実行できる準備を整えていたことがわかります。会員たちは仮設住宅や無料食堂の建設を手伝い、また日本全国の会員たちから食料品、衣類、医薬品があふれるばかりに届けられました。会員たちは3週間にわたって20リットル入りのポリ容器に水を入れて被災地まで運びました。1995年2月の第1日曜日にアジア北地域のすべての会員は特別に断食して、地震の被災者のために献金しました。この被災者の中には家を失った60人の教会員も含まれています。

外国人社会の力

日韓両国の会員たちの力は、両国に住んでいる外国人社会の中にも見ることができます。東京には、英語で集会が行われているワードが3つあります。英語を話す軍人のための地方部が日本に二つ、韓国に一つあります。また、日本では、ブリガム・ヤング大学が企業実習プログラムを実施して成功を収めています。ここで、ブリガム・ヤング大学の学生たちは、教会の大使として^{せいせん}頑張っています。軍人地方部の聖餐会出席率は、80パーセントという高率に達しています。この数字から、彼らがどれほど熱心に教会活動に携わっているかを理解することができると思います。

ます。両国に住む外国人会員は、地元の会員から愛され、心からの歓迎を受けています。

自立する日韓の教会指導者

ところで、わたしたちが日本と韓国の会員たちを見ていて、いちばんうれしく思うのは、指導者が教会本部の指示に頼っていた状態から、アジアにおける主の教会の将来に関する責任は、自分たちにあることを意識する姿勢に、はっきりと変わってきたことです。この変化を目の当たりにしているわたしたちは、大きな感動を覚えています。アジアでの文化的価値観や習慣の多くは、福音の原則と調和したものとなってきています。アジアの教会員は、心から改宗すると、すばらしく献身的な末日聖徒になります。

ヒンクレー大管長の来日に 好意的な記事

1996年5月に、ゴードン・B・ヒンクレー大管長と十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老は、香港神殿を奉獻するためにアジアを訪れましたが、その折に日本と韓国に立ち寄りました。この訪問が教会にとって好ましい結果をもたらしたことをお話しておきましょう。

東京で行われた記者会見に基づいて、ヒンクレー大管長に関する好意的な記事が新聞や雑誌に掲載されました。この記事は、1,200万人の読者のもとに届けられています。韓国でも記者会見が行われ、12の新聞社が2,000万人の読者に教会に対する好意的な記事を届けています。

各報道機関ともヒンクレー大管長の機知とユーモア、精力的な働きを報じていましたが、特に「知恵の言葉」に関する預言者の説明に興味を持ったようでした。また家族と家庭の大切さについて語ったヒンクレー大管長の言葉も引用されていました。大管長は次のように述べています。『家庭における平和が人類と家族の土台となります。家庭には愛と一致があふれていなければなりません。強い国家を建設するには、強い家庭を育てなければなりません。』□

「信仰こめて、 一歩ずつ」

1997年、 全世界150年記念祭



今年度(1997年)は年間を通じ、日本、韓国、ロシア東部の教会員は、世界中の教会員とともに、開拓者たちのソルトレーク盆地到着150周年を祝います。この記念祭は「信仰こめて、一歩ずつ」をテーマに掲げ、教会における世界中の開拓者たちをたたえます。

アジア北地域会長会は、日本における150年記念祭諮問委員会委員長としてゲーリー・松田長老を、同委員会委員長補佐として柏倉仁長老を任命したことをここに発表します。また韓国諮問委員会委員長にはコー・ウォン・ヨン長老、委員長補佐にはキム・チョン・ユル長老がその任に当たります。ここに任命された兄弟たちは皆、アジア北地域の地域幹部として現在働いています。

日本、韓国、ロシア極東部のあちこちで家族の集いや、ワード・支部、ステーク・地方部の評議会が頻繁に開かれ、敬愛する開拓者たちの足跡をたどる方法を計画して、1997年度の霊的な旅路を準備するよう期待されています。

先人たちの多大な犠牲によって もたらされたわたしたちの信仰

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は世界中の教会の会員に対し、次のように言いました。

「わたしたちが今享受している楽しく平安な生活、そして最も大切なものですが、わたしたちの神に対する信仰と知識は、先人たちの多大な犠牲によってもたらされたものなのです。」(「人を救うわたしたちの使命」『聖徒の道』1992年1月号, p.63)

「1850年代に入ると、教会の指導者は経費を削減するための手段として手車隊を編成することを決定した。財政的な援助をできるだけ大勢の人々に行き渡らせるためである。……1856年から1860年までの間にこのような形でユタに向かったのは、10隊であった。そ

のうち8隊は無事ソルトレーク盆地に着いたが、マーティン隊とウィリー隊は早めに訪れた冬に阻まれ、隊の中の多くの聖徒たちが命を落とした。

これらの隊の一員であったネリー・ブーセルは、大平原で10歳の誕生日を迎えた。親は二人とも旅の途中で亡くなっていた。隊が山道に差しかかるころには寒さも厳しく、食糧も底をつき、飢えに弱り果てた聖徒たちには旅を続けるのはとても無理な状態だった。ネリーと姉の二人も倒れてしまった。そして、もうだめだと思ったとき、隊長が荷車で駆けつけ、ネリーを荷車の中に入れ、姉のマギーには荷車にしっかりつかまって歩くように言った。マギーは幸運だった。強制的に足を動かしていたために凍傷にかからずですんだのである。

やがてソルトレーク・シティーに着いて、ネリーが大平原を旅する間ずっと身に付けていた靴とストッキングを脱がせると、凍傷のため皮膚も一緒にむけ落ちた。そしてこの勇敢な少女はひざから下を両足とも切断され、残りの人生をひざで歩いて過ごさなければならなくなってしまった。しかし後に彼女は結婚して6人の子供を産み、家事を行い、子孫を立派に育て上げた。逆境をもともしない彼女の意志の強さと、彼女の世話をした人々の思いやりとは、初期の教会員の信仰と、進んで犠牲を払おうとする心を描いて余りあるものがある。彼らの模範は後に続く聖徒たちにとって信仰の大いなる遺産となった。」(『わたしたちの受け継ぎ』p.70) 初期におけるこれら末日聖徒の開拓者の信仰は、まさにこのようなものでした。

開拓者とは、教会の確立を助ける 世界中の人々を指す

大管長会は、1995年1月に世界中の神権指導者にあてた手紙の中で、次のように発表しました。「1997年7月は末日聖徒の最初の開拓者がソルトレーク盆地に到着してから、ちょうど150年目の記念日に当たります。」大管長会はさらにこう続けています。「そこ

で1997年に末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、開拓者たちが時代と地域にかかわりなく教会にささげた、信仰と献身の大いなる受け継ぎを祝います。開拓者とは、教会の確立を助ける世界中の人々を指します。さらに、現在と将来にわたって主の業を推し進める人々は、熱心に開拓者の示した諸徳を見習うでしょう。」(大管長会の手紙、1995年1月20日付け) この記念祭のテーマは「信仰こめて、一歩ずつ」です。

大管長会のこの手紙には、『開拓者150年記念祭ガイドライン』と題する資料が同封されていました。このガイドラインには、「この盛大な行事を祝い、現代と過去の教会の開拓者たちをしのんで信仰を強めるのに役立つ」(同上)個人、家族、教会のユニットのための活動の概要が提案されています。

「開拓者から受け継ぐ奉仕の日」

この記念祭のハイライトの一つは、1997年7月19日(土)に世界的規模で行われる奉仕活動の日です。この「開拓者から受け継ぐ奉仕の日」の目的は、開拓者の入植150周年の記念日を祝って150時間を地域の奉仕活動に注ぐため、全世界の定員会、補助組織のクラス、あるいは教会ユニットの参加を促すことにあります。この活動により、世界中の

地域社会のために貢献する時間は350万時間を上回ることになるでしょう。

1996年夏、十二使徒定員会のM・ラッセル・バラード長老は、ワイオミングからユタまで続くモルモン道に沿い、開拓者たちの足跡をたどりました。バラード長老は次のように語っています。「わたしは、わたしたちのひたむきな先祖が、なぜあれほどのひどい苦しみを味わいながらも、あのように大変な障害に果敢に立ち向かっていったのか、驚異に思っていました。彼らが犠牲を払い、耐え抜いた一つの理由は、わたしたちのために信仰という遺産を残し、それによって、わたしたちが全世界に教会を築く業を推し進めるといふ大切な責任を感じられるようにするためだったのではないのでしょうか。」(「信仰こめて、一歩ずつ」『聖徒の道』1997年1月号、p25)

教会150年記念祭委員会委員長であるバラード長老は、ステーク、ワード、地方部、支部の指導者たちが、今回の評議会でこの議題を採り上げ、会員たちが霊的な充実感を体験できる活動を選ぶよう、呼びかけています。また、世界に広がる開拓者から受け継いだ信仰を確実に守り続けるよう、会員たちに勧めています。

明るい炎を上げて輝くように

バラード長老は教会の開拓者の足跡

に従うよう強調し、次のように勧告しました。「彼らから受け継いだ信仰という遺産が失われることのないようにしなければなりません。開拓者たちの勇敢な生涯が、わたしたちの心、特に若い人々の心に感動を与え、真実の火と、主とその教会への揺るぎない愛が、昔の開拓者たちの胸の中に燃えたように、自分たちの胸の中にも明るい炎を上げて輝くようにしようではありませんか。」(「信仰こめて、一歩ずつ」『聖徒の道』1997年1月号、p.28)

歴史を学ぶことによって

さらにゴードン・B・ヒンクレー大管長は、1996年10月の総大会の締めくくりの説教で、こう付言しています。「バラード長老が語ったように……来年は、モルモンの開拓者たちが1847年にこの盆地に到着したことを記念する年です。思い起こしてみる事柄が、たくさんあることでしょう。すべて益になることです。わたしたちは皆、過去のことを思い起こしてみる必要があります。わたしたちは歴史を学ぶことによって、過ちを繰り返さないための知識を得られます。また、それを基として、将来に備えられるようになるのです。」(「援助の手を差し伸べる」『聖徒の道』1997年1月号、p.97) □

新しいロゴ——教会の正式名を改めて強調

救い主の御名を強調した新しいロゴのデザインが、大管長会と十二使徒定員会から発表された。

教会広報部長、ブルース・L・オルセン兄弟は次のように語って

いる。「新しいロゴは、教会の正式名と、救い主が教会の教えの中心に位置しておられることを改めて強調しています。そしてわたしたちの主イエス・キリストへの忠誠についても強調しています。

3行にわたるデザインは、字の大きさの配分から見ても、表示されている位置から見ても、救い主の御名が目立つようになっています。教会のイメージを視覚的にいっそうはっきりとさせるだけでな

THE CHURCH OF
JESUS CHRIST
OF LATTER-DAY SAINTS

末日聖徒
イエス・キリスト
教会

教会の新しいロゴ。教会の教えが救い主を中心としていることを強調している。

く、教会の名前が読みやすくなるように、またメディアにおいても正しい認識がなされるように、はっきりと3つの要素に分けられています。」

1838年、教会の正式名称はジョセフ・スマスに啓示として明らかにされた。しかしマスコミも世間の人々も、さらに教会の会員までもが、長年にわたり教会を「モルモン教会」と呼び、会員を「モルモン」と呼んできた。その由来は『モルモン書——イ

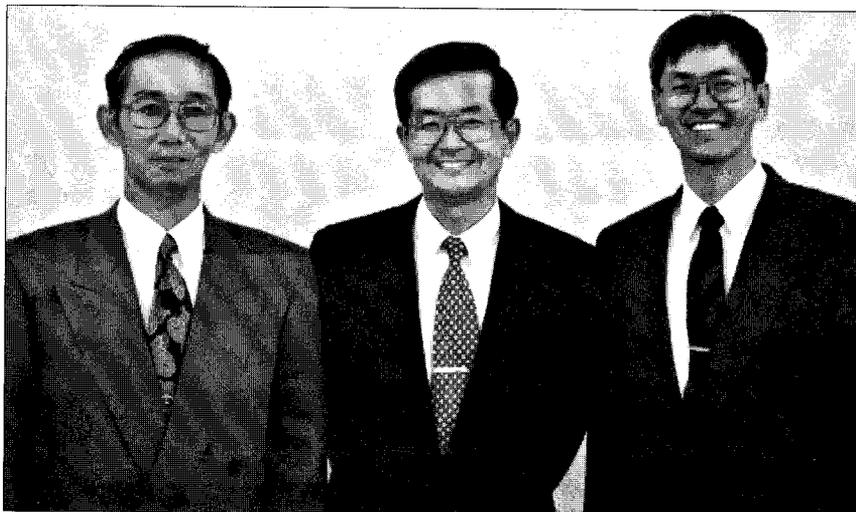
エス・キリストについてのもう一つの証』にある。また「末日聖徒教会」など、ほかの名称で呼ばれることもある。

オルセン兄弟は次のようにも述べた。「教会の正式名と『モルモン』をまったく結びつけられない人が数多くいます。教会の頭であるイエス・キリストの御名が強調された新しいロゴにより、誤解が訂正され、混乱が解消されるよう願っています。

マスコミには、報道で教会の名称を使用する際、初出では正式名称を用いてくださるようお願いしています。そして再び名称を繰り返す際には、『末日聖徒』と呼んでいただければと思います。」□

再組織された名古屋ステーキ会長会

昨年11月3日、アジア北地域会長会第二副会長のL・エドワード・ブラウン長老管理の下に開催された名古屋ステーキ大会で、1987年よりステーキ会長の責任を果たしてきた石井哲志兄弟が解任され、新たに塚原俊英兄弟(写真中央)が召された。ステーキ第一副会長には日坂忍兄弟(写真左)が、ステーキ第二副会長には河内守兄弟(写真右)が召され、その任に当たる。



「まず神の王国と神の義を求めなさい」

名古屋ステーキ会長

塚原俊英

改宗当時のこと

1972年4月、春の日差しがさんさんと降り注ぐ安息日の朝、東京第3ワード(現在の吉祥寺ワード)の門に立ちました。そのとき感じたのは、ここは、この世の騒然とした所とは異なる、ということでした。玄関では若い兄弟姉妹が十数人、笑顔で握手をして歓迎してくれました。そのときも、ここは外の社会とは異なる、ここにいる人たちはどうしてこんなにいきいきしているのだろうという気持ちと同時に温かいものを感じました。

その当時交際していた渡辺智恵子姉妹(今の家内)の紹介で教会を知り、その日から宣教師のレッスンを受け始め、毎週安息日には教会に集うようになりました。宣教師からのレッスンは淡々と進みましたが、時々わたしは宣教師を困らせるような質問をしていました。バプテスマを受けようという気持ちはほとんどありませんでした。

そのようなときに、当時監督をされていた井上龍一兄弟が「塚原兄弟、そ

ろそろ年貢の納め時ですね」と言われましたので、バプテスマのことを少し頭の隅に置くようにしました。

そんなあるとき、宣教師(エスペン長老とウィルソン長老)が、レッスンの中で『モルモン書』について証(あかし)してくれました。わたしはそのとき、まだ『モルモン書』をよく読んでいませんでしたが、宣教師が「この『モルモン書』は真実な書物です」と証をしてくれたとき、彼らの目を見ていたわたしは、彼らが語っていることは真実であるとはっきり分かりました。後になって知りましたが、そのとき初めて御霊(たま)の働きを感じました。そのときのことは、24年たった今でもよく覚えています。

それから間もなく、7月1日にバプテスマを受けました。エスペン長老とウィルソン長老、監督さん、妻の智恵子姉妹、東京第3ワードの兄弟姉妹に感謝しています。

1974年11月2日、わたしたちは結婚し、1975年9月23日にハワイ神殿で永遠の結び固めを受けました。その後、仕事の関係で長崎、東京、名古屋と転勤が続きました。名古屋には1987年4

月に東京より転勤して来ました。9年半になりますが、わたしたちが住んだ場所としてはいちばん長い場所です。

多忙な中での教会の奉仕

昨年の10月は、大変な月でした。一昨年4月から社内の部署が宇宙技術部から航空機技術部が変わり、慣れないため仕事に時間がかかるようになりました。毎週月曜日は、家庭の夕べの日ですので早く帰るようにしているため、働ける時間は会社のほかの人より少なく、水曜日は支部の神権役員会、金曜日は宣教師とスプリットしてのホームティーチングで、ほとんど残業ができず、やり残した仕事が次第にたまってきました。

10月15日から17日は、ステーキの神殿訪問がありましたので、15、16の2日間、休暇を取りました。ちょうど10月は大きな仕事が入っていたために、2日間の休暇を取ることは、わたしにとって冒険でした。休暇の届けを提出する直前に上司から「塚原君、(仕事は)大丈夫ですか」と言われました。わたしは「大丈夫です」と答えました。

10月14日は月曜日であったのに、夕方になって次から次へと緊急の仕事が入ってきて、結局、夜8時半までかかりましたが、何とか仕事を終えること

ができました。

神殿で主から教えられたこと

翌日からの2日間の神殿訪問は、わたしにとってオアシスでした。死者のためにゆっくりと働くとともに、二つのことを主から教えられました。一つは「仕事は大丈夫である」ということ、もう一つは「子供を教えるときに、忍耐強くあるように」ということでした。

神殿に参入した翌週も忙しかったのですが、一つの大きな山を越えることができました。しかし次の山はさらに大きく、越えられそうもありませんでした。土曜日（10月26日）は夜10時まで働き、翌日（10月27日）は安息日でしたので完全に休みました。

主に祈りながらの仕事

月曜日（10月28日）は家庭の夕べの日でしたが、夜中の1時まで働いて、仕事を終えることができました。わたしはその日一日中、主に祈りながら仕事を行いました。「わたしはあなたが命じられてきたことを行ってきました。わたしがこの山を越えることができますように。」

妻に車で会社まで迎えに来てもらって家に帰り、床に就いたのは夜中の3時でした。しかし不思議なことに火曜日（10月29日）には主は時間を与えてくださり、家庭の夕べを行うことができました。

水曜日（10月30日）はまた忙しく、今度は支部の神権役員会があるのに仕事がなかなか終わらず、ようやく区切りがついて夜8時40分に野並支部に着き、役員会に出席することができました。

木曜日（10月31日）、最後の山を越えることができました。毎日天父に祈りながら仕事をしました。また2日間のステーキ大会を無事に迎えることができるように祈りました。主は神殿で「大丈夫ですよ」と言われたように、約束を果たしていただきました。

支えとなった二つの聖句

妻とともに今忍耐強く子供たちを教えるように努力しています。また、そのような忙しい日々の中、毎日聖典を読んでいるときに、二つの聖句がわた

しの大きな支えとなりました。「だけれども、二人の主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」（3ニーファイ13：24）

「まず神の王国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。

だから、明日のことを思い煩ってはならない。明日のことは明日自身が思い煩うであろう。その日はその日の苦勞だけで十分である。」（3ニーファイ13：33-34）

主はあなたを召された

11月2日にステーキ会長会が再組織されるということで、アジア北地域会長会第二副会長のL・エドワード・ブラウン長老と地域幹部のゲーリー・松田長老が名古屋に來られ、ステーキ会長会、高等評議員、監督、支部長らが面接を受けました。わたしも面接を受けました。家に帰り、その日はわたしたちの22回目の結婚記念日でしたので、妻と少しの時間一緒に過ごしました。

その後、ステーキ大会の神権指導者会に出席するため名東のステーキセンターに再び行きますと、ブラウン長老が会いたいとのことでした。部屋に入りますと、ブラウン長老は「主はあなたをステーキ会長に召されました。あなたは、この召しを受けられますか」と聞かれました。わたしは驚くとともに、どう答えてよいか分かりませんで

した。「もし主がわたしを召されたのであれば、喜んでこの責任をお受けします」と答えました。するとブラウン長老は「主があなたを召されました」ともう一度言われました。松田長老も日本語でそのことを伝えてくださいました。

わたしはそのとき御霊により、ブラウン長老と松田長老が語っていることが真実であると知りました。ブラウン長老と松田長老との間には一致があり、確かに主の僕として働いておられることを御霊により知ることができました。

この教会は、主イエス・キリスト様の教会であり、この御方を除いて天父のもとにわたしたちを帰すことのできる御方がいないことを証します。また主イエス・キリスト様はわたしの罪の贖い主であることを証します。（つかはら・としひで）

塚原俊英ステーキ会長 の紹介

1948年山梨県中巨摩郡甲西町生まれ。1972年に改宗（24歳）。慶応義塾大学大学院にて機械工学専攻、修士課程修了。三菱重工業株式会社勤務。1974年に渡辺智恵子姉妹と結婚。4人の子供がいる。長男・千尋（20歳）、長女・千春（18歳）、次女・千明（16歳）、三女・千里（11歳）。これまで副伝道部長、ステーキ書記、監督、支部長、長老定員会会長などの責任を果たしてきた。野並支部所属。



塚原ご家族

独身会員のための 「神殿交流会」のご案内

関 東独身会員サポート委員会が、アジア北地域会長会の承認の下に組織されたのは、1995年7月のことです。当時、地区代表であった新山靖男・青柳弘一・田中靖也長老らが地域アドバイザーとして召され、委員会が発足、活動の一環としてまず「神殿交流会」を担当することになりました。

実行委員会は、東京地区9ステーキの担当高等評議員により構成され、第1回目を一昨年9月に実施しました。「神殿交流会」は、各ステーキが持ち

回りで担当し、プログラムの立案から実施に至るすべてを行います。担当ステーキ以外の実行委員は、これを助ける形で参画しています。

昨年11月の「神殿交流会」で8回目を数え、これまで10数組の新しいカップルが誕生し、東京神殿で永遠の結婚をされました。

今年度の「神殿交流会」は、下記の日程で実施されます。一人でも多くの兄弟姉妹が参加されるよう願っています。

●日程（年4回を予定）

2月14-15日（金、土曜日）

5月23-24日（金、土曜日）

7月4-5日（木、金曜日）

10月9-11日（木、金、土曜日）

●場所 東京神殿別館（予定）

●参加資格 25歳以上の独身会員

●申し込み方法 実施日の1か月前に全国の各ワード／支部に申込用紙を送付しますので、監督／支部長より入手してください。

●参加費用 1泊2日の場合、約3,500円。交通費は自己負担。

（関東独身会員サポート委員会）

特集 一 神殿交流会での出会いから

今まで見えていなかった 相手のよさを知って

——「まずつきあってみるのが大事」——

あびこ
我孫子ステーキ日立支部
片岡利晴

彼 女とは同じステーキだったので、以前に話をしたこともあり、ある程度は知っていましたが、彼女との交際のきっかけとなったのは、神殿交流会でした。交流会では何人かの姉妹とデートをしました。話をしているうちに楽しかったのが彼女でした。

ただ、わたしにとって小さな問題がありました。彼女の年齢が少し離れていたのです。この人との結婚は無理があるかなと思いましたが、ただそれだけの理由で彼女との交際をお断りするのとはとてももったいなく思いました。彼女がとても魅力的だったからです。

そこでわたしは思いました。「とりあえず彼女のことをよく理解しよう。彼女のことをよく知ったうえで、そのとき合っていると分かれば結婚すればいいし、合っていないければ別ればいい。」そうして彼女とつきあっていくうちに、彼女の持っている素晴らしい

ところがだんだんはつきりと分かってきました。そして結婚を決意しました。

まずつきあってみるのが大事だと思います。そして相手のことをよく知ることです。そうすると、今まで見えていなかったものがだんだん見えてきます。だれもが素晴らしい何かを持っていると思います。それを見つかることができたなら、その人を愛することはとても簡単だと思います。

今はとても幸せです。これからもずっと幸せでしょう。すべての人がこの

ような幸せを感じることができたら、とてもすばらしいと思います。（かたおか・としはる 支部書記）



片岡ご夫妻

神殿交流会でのデートから

——「幸せに幸せを重ねて、
神様にご奉仕できる人生に」——

我孫子ステーキ日立支部
片岡千穂乃

主 人とは、一昨年12月の神殿交流会がきっかけで、結婚を考えたとつきあいが始まりました。「この交流会でわたしの伴侶と出会えないのな

ら、もう九州へ帰ろう」と静かな決意の下での参加でした。

みんなが和気あいあいと語り合っている中、「もうわたしは、声をかけてもらえるような年齢は過ぎてしまったんだなあ」と、なぜかその場の雰囲気とはかけ離れた気持ちになっている自

分がいました。

それならと部屋の片隅に用意されていたリフレッシュメントをつまもうとしたとき、すぐそばにいた片岡兄弟が声をかけてくれました。同じ我孫子ステーキで顔なじみだったからなのでしょう。それでわたしたちは、デートプログラムの1時間を一緒に出かけることになったのです。

東京タワーへ歩いて行きました。20

分ぐらいのつもりが、たっぷり40分はかかってしまいました。駆け足の東京タワーデートとなりましたが、帰り際に「あと2時間くらい取っていたらよかったね」と言ってくれた言葉が、とてもうれしかったのを覚えています。

彼とのおつきあいは、いつもほんわかした幸せをわたしに与えてくれました。年齢のことを考えると、問題がたくさんありそうなのに、なぜかそ

ばに立っていると、すんなりとしていて何も問題がなかったのです。ずうっとその気持ちは続きました。そして、心配なことがあっても話をすれば、それはいつも解決されていきました。

今は結婚してほんとうによかったと心から思います。幸せに幸せを重ねて、そのことによって神様にご奉仕できる人生にしたいと心から願っているところです。(かたおか・ちほの 日曜学校教師)

指導者の導きに従って

——「真剣に結婚について考えているのなら、
一人はすてきな兄弟を見いだせたとお思いますよ」——

町田ステーキ町田第一ワード
山田百合香

結 婚して4か月が過ぎましたが、あつと言う間で驚いています。

わたしたちは1994年5月の神殿交流会で初めて会いました。この交流会は、松下泰洋兄弟姉妹（現神戸伝道部長ご夫妻）の主催で行われました。

そのころのわたしは、結婚について



山田ご夫妻

真剣に考えていましたが相手を見いだせず、松下兄弟に相談してみました。わたしなりにまじめに結婚について考えていたのですが、松下兄弟は「あなたは言葉だけで、言っているほど結婚したくないんじゃないですか。あなたよりも真剣に考えている姉妹はたくさんいますよ。神殿交流会に出てみませんか」と言われて参加しました。

主人の方かというと、やはり彼の当時の監督さんに勧められて参加しました。しかし交流会のときは、お互いあまりぱっとしない印象で別れました。その後すぐ、松下兄弟からのフォローがあって「すてきな兄弟はいましたか。ほんとうに真剣に結婚について考えているのなら、一人はすてきな兄弟を見いだせたとお思いますよ。その人の名前を書いてわたしに教えてください」と言われました。

今思うと、松下兄弟のこの言葉で今の主人を見いだせたように思います。しかし交流会の後は、たまにデートをした

り、電話をしったりという程度で大きな進展もなく、月日が流れて行きました。

1995年の冬、わたしはいつものようにクリスマスカードや年賀状の準備をしながら彼のことを思い出しました。しかし彼の住所をなくしてしまったことに気づき、彼と同じワードの兄弟から住所を聞いてカードを出しました。それから連絡を取り合うようになり、お互いの気持ちが確固たるものとなって、1996年7月12日、東京神殿において結婚し、現在に至っています。

結婚前と後では、お互いのことを思う気持ちが随分変わり、もっと理解できるようになりました。ある既婚者の方がわたしにおっしゃった言葉があります。「結婚はやっぱりしてみないと分からないものよ。」

あまり家庭の愛を知らずに育ったわたしですが、小さいころから自分の家庭を持つことを楽しみにしていました。やはり福音によって結ばれ、永遠に一緒にいたいと思うとき、神殿結婚のすばらしさを改めて感じます。神殿結婚に導いてくださった指導者に心から感謝しています。(やまだ・ゆりか 扶助協会教師)

電話と手紙のやり取りを通して

——地理的な問題もよいコートシップの期間に——

名古屋西ステーキ高畑ワード
白井利典

わ たしたちは、昨年2月16日から18日の神殿交流会で初めて知り合い、同年8月24日に東京神殿におい

て結婚しました。

わたしたちの場合は、神殿交流会2日目の活動前に少し話をしたことがきっかけとなり、その日の午後、気に入った人の名前を記入するリストには1番目にお互いの名前を書いていました。そ

の後2時間ほど都内でデートをしました。(その直後、彼女は所用で仙台に帰ってしまったので、このとき実際に会えたのは2時間半ぐらいです。)

それからは約1か月間、電話と手紙で連絡を取り合い、2回目に東京で再会したときには、お互い結婚の約束を交わしました。

ここで少し交流会の印象をお話すると、多くの既婚者の兄弟姉妹がとて

も熱心に、また温かく参加者のお世話をしてくださったことに感動いたしました。わたしたちも、いつかこのような夫婦になりたいという励みにもなったことを覚えています。

当日、東京は大雪でしたが、お世話係の方々心が込めて作ってくださった夜食のビーフシチューに身も心も温められる思いでした。交流会の内容としては、自然な出会いの機会を与えてくれるゲームや自己紹介の活動が多く、終始気負わず気軽な気持ちで参加することができました。

初めての出会いから約1か月後に結婚を決めました。教会員ではない友人からは、あまりに決断が早いため、ほんとうに大丈夫なのかという懸念もありました。そう言われてみると確かに早い決断でしたが、同じ価値観を持つ者同士のためか、自然にそのような流れになりました。周りの教会員の友人を見渡しても、同じように数回のデートを経て結婚に至るカップルは結構います。

結婚後のわたしたちは、一緒にいて

とても楽な関係ですし、おかげさまで幸せな日々を送っておりますので、交際期間はそれほど問題ではないように思います。

その後約5か月の婚約期間を経て結婚するまでの間に、実際に会えたのはせいぜい月に1、2回（もっぱら民間披露宴の打ち合わせを兼ねて）でしたから、結婚式までは数える程度しか会っていません。あとは相変わらず電話、手紙での交際を続けました。

交流会の出会いはこの地理的な問題もあるかもしれませんが、この時期は、わたしたちにとって良いコートシップの期間になったと思います。

わたしは、かつてインスティテュートで受講した「日の栄えの結婚」のレッスンを再度受けるようになり、また彼女は「日の栄えの結婚」のテキストを読んだり、教会のご好意で毎週神殿結婚のレッスンをしていただいたりと、地理的に離れてはいても、それぞれ結婚の霊的備えを心がけていました。そして電話では将来の家庭生活の夢を語り合いながら、神殿で結婚の結

び固めの儀式を受ける日を待ち続けました。

今は、この交流会を通して良き伴侶^{ほんりよ}に巡り会えたことに感謝しつつ、祝福された日々を送らせていただいています。神殿での出会いを企画してくださった交流会のスタッフの方々には、心より感謝しております。これからも神殿交流会を通して、一組でも多くのカップルが誕生することを願ってやみません。（しらい・としのり 長老定員会会長）



白井ご夫妻

釧路地方部の 若い男性・女性の交流会 「デゼルト・カンファレンス」

昨年10月26日(土)、釧路地方部若い男性・女性の「デゼルト・カンファレンス」が行われました。

釧路地方部は、広大な十勝平野の帯広、釧路湿原と太平洋の漁港の釧路、盆地で冬の寒さの厳しい北見、オホーツク海に面し流水^{あはしり}が押し寄せる網走、北方領土を臨む根室と、とにかく広い地域で組織されている地方部です。ですから、青少年の兄弟姉妹が集まって活動するのも容易ではありません。

年に2度の親睦^{みづはら}と交流を深めることを目的に、また、蜜蜂^{あかし}のように賢明に、従順に働き、自らの義や証^{あかし}を蓄えて、約束の地へ行けるようにとの願いを持って、毎年各支部で活動をしています。今回の網走での開催に当たっても、少なからぬ信仰と犠牲の下に開かれまし

た。なぜなら5つの支部は、行き来に、それぞれ片道、車で2、3時間かかる距

離にあるからです。

今回の活動は、前半は全員でミニバレー、食事をはさんで若い男性は指導者の兄弟とともにバスケットで汗を流し、若い女性は講習会でクリスマスに向けて、クリスマスグッズ作りに励みました。短時間ながら作品の完成に向けて一生懸命に取り組んでいました。



クリスマスグッズ作りを楽しむ若い女性

「デゼレト・カンファレンス」以外の若い女性の活動の一つとして、『からし種』というタイトルで新聞を発行

しています。ここでは各支部の独自のカラーで若い女性の証や活動を分かち合っています。

「からし種一粒ほどの信仰があるなら……あなたがたにできない事は、何もないであろう」(マタイ17:20)と

いうテーマ聖句を掲げ、様々な活動により交流を深めていますが、遠くでも努力することにより、良い結果が生まれることを実感しています。

各支部の会長会、支部長会の協力と、主イエス・キリストの見守りの中、「デゼレト・カンファレンス」を無事に終えることができ、心から感謝しています。(レポーター：木戸由美子、釧路地方部若い女性第一副会長)



「デゼレト・カンファレンス」に集った釧路地方部のユースと指導者たち

キリストを象徴する教会堂に ——阪神大震災の混乱の中から——

神戸ステーキ北六甲支部
長沼雅仁

この支部を訪問すると、『賛美歌』2番『山の上に』の歌を思い浮かべます」と神戸伝道部の松下泰洋部長はおっしゃいます。昔の開拓者たちが越えたロッキー山脈のミニチュア版のような感じで、六甲山脈を越えた神戸市北区と西宮市の北の境に、約5年前、この北六甲支部は設立されました。

北六甲支部は、1991年5月5日、神戸市北区、西宮市の北部、それに三田市、鈴蘭台方面からの教会員が集い、約50人で始まりました。当時はビルの中にある体育館を借り、聖餐会、続いて間仕切りをして部屋を作り、日曜学校や初等協会、神権会、扶助協会などのクラスを開いてきました。

夏は暑く、冬は身も凍るような寒い集会所でした。それからの4年間、転

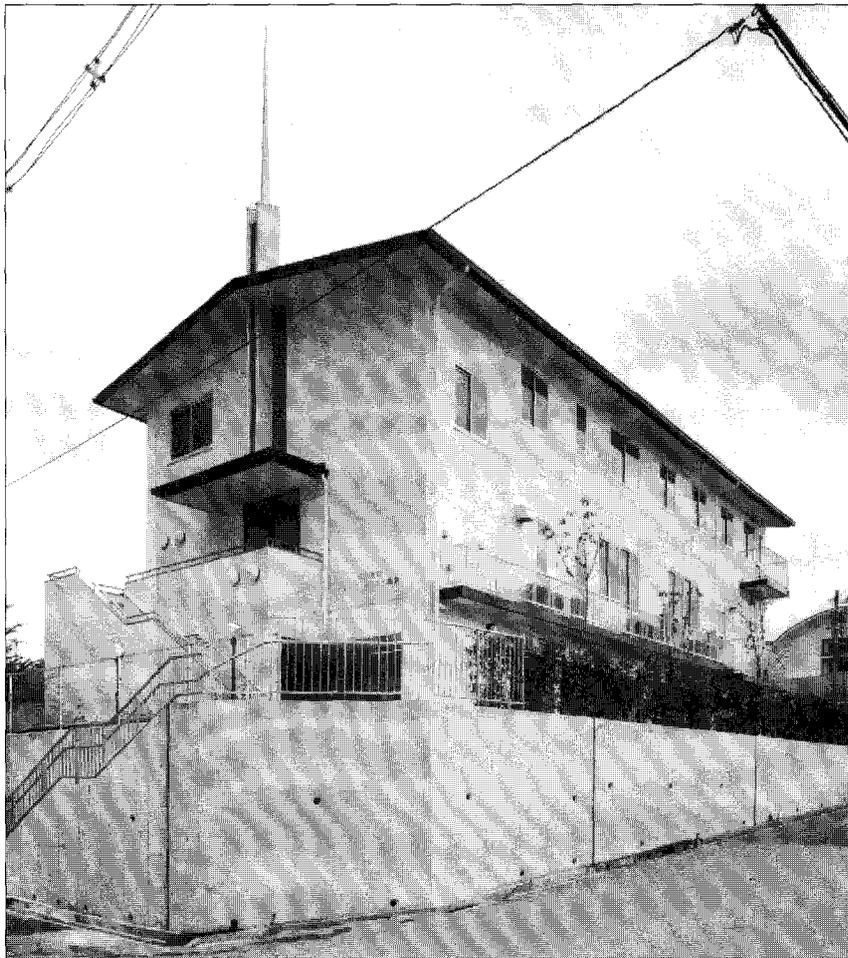
入会員、改宗者、活発化などの働きかけにより平均出席が100人を超えるようになり、1995年1月に土地購入が決定されました。

わたしたち会員がとても喜んだ矢先の2日後、阪神大震災に見舞われ、喜びは混乱へと変わりました。会員一人一人の献身的な犠牲と奉仕、祈りにより神戸市の復興も進み、その年の12月

23日に「^{くわ}鉄入れ式」が行われました。このとき堂ノ本勉ステーキ会長より「震災でわたしたちの心は揺れ、困難な状況を経験しましたが、これからはこの教会堂の土台と同じように、神様の強い土台をわたしたちの心の中に築きましょう。それはわたしたちの神様^{あかし}に対する思い、信仰、証、そしてキリストに対する知識などによって築き上げていくものです」と、わたしたちの生活の基盤は救い主の教えであることを再度強調されました。

そして、この度七十人のL・エドワ





そして、この度七十人のL・エドワード・ブラウン長老管理の下で献堂式が行われました。この中でブラウン長老は「ここに集っている一人一人は特別な人です。大管長会と十二使徒定員会は1万のステーキと1,500万人の会員のことを考えて準備しています。ここに集っている人が広い視野をもって生活するならば、やがてこの教会は支部からワードに、そしてワードからこの地を中心にステークを確立することができます。そのためにも家族で毎日の『祈り』『聖典学習』そして毎週の『家庭の夕べ』の3つを行い、家族が一致するようにしてください」とのお話を祝福とともにしてくださいました。

現在120人近い聖徒が集っていますが、神様から祝福を頂くことができるように、そしてここに集う会員一人一人が「キリストを実感し、キリストの証人となり、そしてキリストを象徴できる生活」を送ることができるように願っています。

キリストの「なくてはならないものの一つ」である霊的な交わりを毎日持つことによってキリストを実感することができ、そしてこの美しい教会堂がほんとうの意味で、キリストを象徴できる建物となり、そしてわたしたちの信仰の旗となるように願っています。

広い視野に立ち、人の理解力を超えて偉大な神の業を託されているわたしたちは、これからも地域の方々に喜ばれる救い主の業を雄々しく行っていきたいと思います。(ながぬま・まさひと)

神戸ステーク 北六甲支部

所在地 〒651-14 兵庫県西宮市上
山口町2丁目10番5号

電話 078(904)0116

竣工日 1996年7月31日

敷地面積 662.0㎡

建築面積 193.7㎡

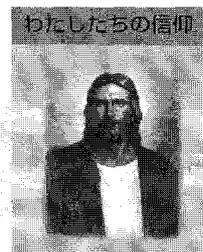
延床面積 432.8㎡

価格改定のお知らせ

1997年1月16日をもって、下記の価格が改定されました。

- 若い女性ビーハイブ確認証ペンダント (チェーン付き)
(32554 300) 950円→1,000円
- 若い女性マイヤメイド確認証ペンダント (チェーン付き)
(32555 300) 950円→1,000円
- 若い女性ローレル確認証ペンダント (チェーン付き)
(32556 300) 950円→1,000円
- 若い女性ロゴペンダント (チェーン付き)
(32557 300) 550円→470円
- 英語版ビデオ『イースター・ドリーム』
(53067) 550円→350円

新刊のお知らせ



●ビデオ『わたしたちの信仰』

(53435 300) 約12分 500円

世界各国の教会員がキリストへの信仰と証、教会生活について語っている。教会員でない人々を対象として制作されたこのビデオは、オープンハウスやその他の催し物で教会を紹介する際に活用できる。



●『子供の歌集』

(34831 300) A4変型 160頁 850円

従来の『子供の歌』『子供の歌-増補』『活動の歌』に取って代わる歌集。122曲を収録。スパイラル製本。

12月に召された専任宣教師

第206期生 10人



前列左から1-6, 後列左から7-10

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 黒田真紀	東京北M / 宇都宮D / 小山B	福岡伝道部
2. 刑部佳名子	高崎S / 前橋W	福岡伝道部
3. 佐々木恵李子	札幌S / 札幌東W	福岡伝道部
4. 岸本恵乃	沖縄那覇S / 沖縄W	東京北伝道部
5. 大塚愛美	横浜S / 横浜第二W	仙台伝道部
6. 槇田朋子	神戸M / 奈良D / 奈良B	福岡伝道部
7. 秋山治	東京西S / 国立W	岡山伝道部
8. 塩田通理	町田S / 町田第二W	札幌伝道部
9. 榊原賢治	大阪S / 阿倍野W	札幌伝道部
10. 山本雄一	岡山M / 松山D / 松山B	東京北伝道部

S: ステーキ, M: 伝道部, D: 地方部, W: ワード, B: 支部

役員の変動

1996年11月12日から1996年12月16日まで管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 仙台伝道部青森地方部青森支部
支部長: 佐々木卓
- 東京北ステーキ坂戸支部
支部長: 三浦信一
- 東京南ステーキ東京第三ワード
監督: Dale Thompson
- 横浜ステーキ横浜中央ワード
監督: 高田一則
- 名古屋伝道部石川地方部野々市支部
支部長: 川村真市
- 名古屋伝道部福井地方部福井第一支部
支部長: 清川浩
- 名古屋ステーキ野並支部
支部長: 板倉秀樹
- 名古屋ステーキ名東南ワード
監督: 米田光宏
- 大阪堺ステーキ岩出支部
支部長: 木村研一郎
- 神戸伝道部福知山地方部西脇支部
支部長: 竹内正明
- 神戸伝道部奈良地方部飛鳥支部
支部長: 長綱徹
- 岡山ステーキ倉敷ワード
監督: 池田利章
- 広島ステーキ徳山ワード
監督: 藤井一雄

皆さんの原稿を
募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただきますことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第, 編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕, 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

海外に召された日本人宣教師



中嶋美保
オーストラリア・シドニーサウス伝道部
1997年2月, 神戸M / 奈良D / 飛鳥B出身